

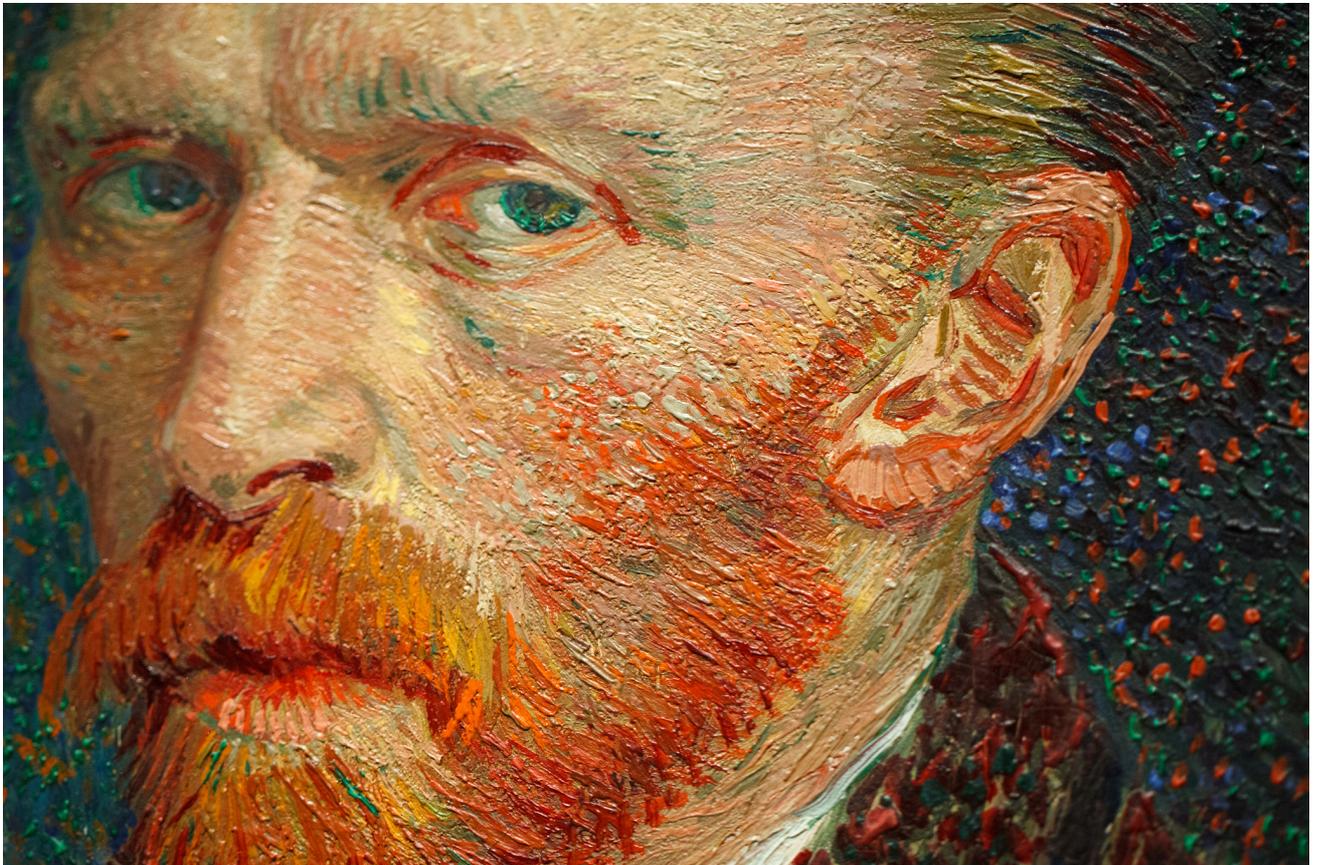
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 19

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 361. 自我の発達と言語の発達の共通点
- 362. 「タレントディベロップメントと創造性発達プログラム」の同僚たちとの出会い
- 363. カリキュラム再考
- 364. 知性・能力の発達に関して注目する「ダイナミックネットワークモデル」
- 365. 第二回目のオランダ語のクラス: 語形変化・数字・アルファベット
- 366. 閉鎖系システムから開放系システムへ向かって: 他者からの刺激と促進
- 367. 記憶の秩序体
- 368. 個人と組織の発達に関する新たな理論モデル「ダイナミックネットワーク理論」
- 369. 想い
- 370. 学ぶ喜びの感覚質
- 371. 重力と波
- 372. 思想や哲学
- 373. オランダ語による「スピードデート」
- 374. 雑菌状態の中へ: 「ノイズ」を学習に組み込む重要性
- 375. 自助
- 376. 「タレントディベロップメントと創造性の発達」: 第一回目のクラス
- 377. 「才能」に関する近年の視点
- 378. 注目を集める教育手法「非線形教授法 (nonlinear pedagogy)」について
- 379. エゴン・ブランスウィックの「心理学的生態学」に関する所感
- 380. 第四回目のオランダ語のクラス: 所有格・時間表現・時の前置詞など

---

### 361. 自我の発達と言語の発達の共通点

昨夜は、昨日の午前中に参加したオランダ語クラスの内容を復習していた。学習内容を復習しながら、発音にせよ、文法にせよ、単語にせよ、目の前には未知なる言語の大海が広がっているのを感じていた。同時に、自分が日本語や英語を学んできた過程を振り返ってみると、これらの言語を学び始めた時も今と全く同じような状態からスタートしたのだ、と思わされた。

ほぼ白紙の状態生まれ、日本語に溢れる環境の中で日本語を習得してきたプロセス。アルファベットという日本語とは似つかない文字体系に初めて触れた小学六年生の時から、少しずつ手探りで英語を習得してきたプロセス。長大な時間をかけてそれら二つの言語を彫琢し続けてきた結果として、今の自分の言語体系があるのだと思うと、とても感慨深い気持ちになった。

始まりの足取りはいかにおぼつかなくても、障害を乗り越え、紆余曲折を経ながら歩き続けることによってしか、そうした言語体系が自分の中で構築されることはない、ということを知る。今この瞬間において、自分の中にあるオランダ語という建築物は、土台すら存在していないようなまっさらな状態である。

ここから確かな足取りで歩き始めるということ、始まりはいつもこうであったということ、そして時間をかけて歩き続けることによってしか到達しえない境地がこの世界には存在しているということ。それらを片時も頭から離さずにオランダ語の学習に取り組んでいく必要があるのだ。

昨日のクラス終了後、英語空間内における日常の身体と精神を手放し、オランダ語空間内に構築し始めた極めて脆弱な身体と精神でフローニンゲンの街の中心部に買い物に出かけた。すると、オランダ語空間の中で誕生し始めたばかりの私の身体と精神は、街の中に溢れる未知なるものにかき消されそうになっていた。それぐらい、街の中には今の私のオランダ語力では認識できない曖昧なものが無数に存在していたのである。

そこからふと、過去のゼミナール「発達理論実践編」での議論を思い出した。その時は、自我の発達研究の大家であるジェーン・ロヴィンジャーに触れ、「自我の発達とは曖昧なものを受け止められる許容度の発達である」とロヴィンジャーが述べていることを紹介した。要するに、自我の発達とは

---

自分の中でどれだけ矛盾を受け入れられるかどうか、異質なものを受け止められるかどうかの度合いの発達である、ということである。

このことを紹介した時、ある受講生が興味深い話を共有してくれた。文科省にいたある英語教師の方が、「英語でのコミュニケーションが上達するためには曖昧さに耐える能力を身につけることが不可欠である」という趣旨のことを述べていた、とのことである。

これは至言であり、そこには幾つかの重要な洞察が内包されているのではないだろうか？一つには、私たちのコミュニケーションというのは、各自の思考や感情といった、そもそも実に曖昧なものに立脚する形で成り立つものである。母国語である日本語でさえ、話し言葉を使っている時には正確な文法に則っているわけではなく、実に曖昧な文脈の中でお互いの考えや気持ちを推察しながらコミュニケーションが進行していくのである。

このようにコミュニケーションというものは、実に曖昧なものに包まれた状態でなされる行為だと思うのだ。これが母国語ではなく、英語になるとその曖昧さの度合いは一層高まる。英語というのは普遍語の地位を確立していながらも、それぞれの国に固有な英語が存在していると思う。日本人の英語を他の国の人々が聞くと、全く理解されないというようなことが頻繁に起こるが、なぜだか日本人だとその日本人が言っていることの意味がわかる、という経験をしたことはないだろうか。

これはもしかしたら、日本には固有の英語が存在しており、それは日本文化の影響を受けたものであるため、同じ文化圏の人間であればいかに発音が汚くても意味内容が理解できてしまう、ということが起こるのではないだろうか。日本文化に影響を受けた英語が存在しているのと同様に、世界には様々な文化の影響を受けた英語が無数に存在している気がするのだ。

表面的なところで言っても、日本人の英語の発音は独特であるし、インド人の英語の発音やスペイン人の英語の発音もまた独特なのである。この「独特」ということは曖昧さと密接につながっており、同じ独特性を共有していない場合、他の国の出身者が話す英語は実に聞き取りにくい曖昧なものに変貌する。

英語のリスニングに限ると、こうした曖昧さを受け入れられるようになること、つまり多様な音を認識できるようにしていくことが重要なのだ。英語を話す人の数と同じだけの無数の音声領域が存在する

---

---

のだ、と思っても差し支えはないだろう。そうしたおびただしい数の音声領域に圧倒されることなく、耐久性を高めていくことがリスニング能力の向上過程で求められることなのではないか、と思うのだ。

聞き取れる音域の幅を広げることは、理解できる領域の幅を広げることにつながり、ひいては曖昧なものに押し潰されることなく自分の中にそれを受け入れていくことを意味する。

このようなことを考えてみると、ある言語を習得するというのは、曖昧さに押し潰されることなく、曖昧さを受容した形で他者とコミュニケーションが図れるようになってくることなのではないかと思う。同時に、新たな言語を習得することによって、学習主体の自我そのものがより曖昧なものに耐えられるようになってくる気がするのだ。

### 362. 「タレントディベロップメントと創造性発達プログラム」の同僚たちとの出会い

フローニンゲンの街はすっかりと秋らしくなり、私たちが秋という季節の中にいることを実感させてくれるあの柔らかなクリーム色の太陽光が日中の間降り注いでいる。太陽が沈むと、秋独特の静けさが世界に染み渡っていく。今、窓の外に見えるのは、秋の夜空に浮かぶ三日月である。遙か彼方に浮かぶこの三日月は、自分がこれから遠い世界へ向かっていくことを密かに暗示しているように思えた。そのようなことを思いながら、今日の日中の出来事を振り返りたい。

今日はついに、「タレントディベロップメントと創造性発達プログラム」のメンバーと顔合わせをする機会があった。プログラム長のルート・ハータイ教授から招待メールが届き、一年間のプログラムの流れや修士論文の作成に関する情報を共有する説明会に参加し、その後、親睦会を兼ねたランチミーティングに参加してきた。

説明会は自宅から徒歩15分の心理学科・社会学科・教育学科のメインキャンパスの一室で行われた。教授たちの研究室を横切る形で教室に向かっていると、廊下の壁には多様な絵画作品が飾られていることに気づいた。これは大学内の他の建物でもそうであり、行き道に見た家々の中にも大抵何かしらの絵画作品が飾られている。アートとオランダ文化は切っても切れない関係にあるらしい。

---

説明会の会場に到着すると、これから学びを共にする同僚たちの姿を見ることができた。ここには総勢18名の修士課程の学生と数名の博士課程の学生、それからこのプログラムを主導していく何名かの教授たちが集まっていた。教室の最前列の左端に席を確保した私は早速、これから説明役を務めるプログラム長のルートに挨拶をしに行った。

私:「やあ、ルート。久しぶり！元気？」

ルート:「おお、ヨウヘイ、久しぶり！うん、元気だよ。いつ頃オランダに来たの？」

私:「八月の頭だよ。そこからドイツ、スイス、フランスに旅行に出かけ、随分とヨーロッパに慣れてきたと思う(笑)」

ルート:「それはいい。今のところ、どう？クラスの履修の仕方や各種の施設の使い方などの情報はちゃんと行き届いてる？」

私:「うん、大丈夫だね。必要な情報は全てメールでみんなに届いていると思うよ。」

ルート:「不自由なく全て順調のようでよかったよ。」

このような簡単なやり取りの後、ルートによる説明会が始まった。「タレントディベロップメントと創造性発達プログラム」というプログラムは、(1)発達心理学科(2)産業組織心理学科(3)心理統計学科という三つの学科を横断する形でカリキュラムが構成されている。構造的発達心理学、企業組織の人財育成や成人教育、各種アセスメントについて関心のある私にとって、これら三つの学科を横断する形で複合的にそれらの関心事項の理解を深められるのはとても有り難い。実際に、この一年間の私のカリキュラムはそれら三つの学科のコースで構成されている。自分で組み立てたカリキュラムに従って、人と組織の発達に関する理論と実践手法に磨きをかけていきたいと改めて強く思った。

再度ルートから、各学期に提供される数々のコースの概要について説明があり、一年間で履修することが義務付けられている60単位の配分について説明があった。そこからさらに、一年間の中で最重要な課題である修士論文について説明があった。フローニンゲン大学は世界各国の大学と連携しており、特に欧州各国の大学との連携が密であるため、留学を奨励している。なんとわずか一

---

年間のこのプログラムでも留学が推奨されているので驚きである。私の場合は、とにかくフローニンゲン大学でダイナミックシステムアプローチを習得することに主眼があるので、プログラムの中で数ヶ月間欧州の他の国へ留学するというのは現実的ではない—もちろん、それはそれで学びが多そうであるが。

説明が終わった後、メンバー全員でランチ会場に向かった。学内のこのカフェテリアは、実は前から着目していた場所であった。というのも、大学のメインの建物にあるカフェテリアや語学センターのある建物のカフェテリアはスペースも広く立派なのだが、よりこじんまりと静かにランチを楽しむには、今日のランチ会場である隠れ家的なこのカフェテリアが好ましいと思っていたのだ。

学生のみならず教授陣を含めると総勢25名ぐらいのメンバーがいくつかのグループに分かれ、ランチをとることになった。二時間ぐらいのランチミーティングの最中、面白い話が豊富に出てきたのだが、この瞬間に印象に残っていることを書き留めておきたい。私がランチを一緒にしたのは、プログラム長のルート、フローニンゲン大学の哲学科を修了してから先日まで六ヶ月間ほどアジアを放浪していたオランダ人のジャーノ、フローニンゲンから三時間の距離にあるライデン(画家のレンブラントが生誕した街)から通っているオランダ人のハンナ、ドイツのテレビ局に勤めていたドイツ人のジェレミー、インドネシアの銀行に勤めていたインドネシア人のタタである。

タタ:「そういえば、結局このプログラムには何名の修士課程の学生が在籍することになったの？」

ルート:「総勢18名かな。」

私:「そのうち留学生は？見たところ、タタと僕しかアジア系はいなさそうだよね？」

ルート:「そうだね、アジア系はヨウヘイとタタだけかな。あとは、ドイツから2名とポルトガルから1名という構成かな。」

ハンナ:「そうそう、私がインターネットで検索した時に、タレントディベロップメントと創造性に関して学べるプログラムが世界にここしかなかったのよね。だから今ここにいるわけだけど(笑)」

---

私:「そうなんだよね、ここしかないんだよね。そういう意味で感謝してるよ〜、ルート(ルートの肩を叩く)。このプログラムの創設者かつコーディネーターとしてね。」

ルート:「ありがとう(照れ笑いを浮かべる)。ただ、まだマーケティングがうまくいってなくて欧州各国でも認知度が低いんだよね。タレントディベロップメントと創造性に関しては、近年、スポーツ、企業社会、教育等を含めて色んな分野で着目されているんだけどね。」

ジャーノ:「そうだね、タレントディベロップメントと創造性というのは色んな分野でホットなテーマだね。『マーケティングがうまくいってない』って言ってたけど、このプログラムにどれくらいの応募があったの？」

ルート:「う〜ん、100人ぐらいかな……。そのうち、80名ぐらいは不合格になってしまったけど。」

ジェレミー:「結構応募あるじゃん！80名も落とされたの？」

ルート:「うん、選考過程の最初でそもそも統計学の理解が十分にあるかどうかで、そこで一気に絞り込まれるようになっているみたいなんだよね。ヨウヘイも去年はそうだったでしょ？」

私:「うん、そうだね。去年の不合格の理由はまさに統計学の知識の有無だったね。まさか80名近くが不合格になっているとは知らなかったよ……。ところでルート、ここに座れば？(笑)」(他の全員がテーブル席に座る中、一人だけ立って話をしていたルートへの提案に対して一同爆笑)

ルート:「ありがとう(笑)。そう考えるとこのプログラムへの応募は結構あったことになるかな。まあ、これから徐々にマーケティングにも力を入れていくよ。今、オランダ国内と欧州各国の大学からこの分野の優秀な教授陣をリクルートすることにもより力を入れていこうと思ってるんだ。」

ジェレミー:「そういえばさっき、ドイツから来た留学生が他にもいると言っていたけど、どの人？」

私:「そう、それは自分の質問でもある。それに追加で、オランダ人がどのようにオランダ人とドイツ人を見分けているのかについても教えて欲しいな。」

ジャーノ:「それ得意だよ！顔の雰囲気から80%の確率で当てることができると思う。」

---

---

ハンナ:「そういえば、ジャーノの顔はイギリス人っぽくない？ほっぺの感じとか(笑)」

タタ:「うん、そう思う(笑)」

私:「うん、そう思った。英語はイギリス英語ではなくアメリカ英語に近いけど(笑)」

ジャーノ:「イギリス人っぽい？そうかもね……。一応、生粋のオランダ人だけど(笑)。」

ルート:「あのテーブルにドイツ人が二人いるよ。一人は修士課程の学生でもう一人は博士課程の学生だね。さあ、どの人でしょうか？(笑)」

ジャーノ:「一人目は簡単だな～。あの青いシャツの男性でしょ。」

ルート:「正解！」(一同拍手)

ジャーノ:「次は、その横の女性でしょ。」

ルート:「残念！」

ジャーノ:「じゃあ、その横の横の横の女性！」

ルート:「残念！」

ジャーノ:「やばい、80%を切った……(苦笑)。ああ、その女性の横の男性だ！」

ルート:「残念～！」

一同:「全然外れてるじゃん、ジャーノ！」

終始和やかな会話を楽しみ、あれよあれよと言う間に二時間が過ぎていた。五年半前に初めて米国に渡った時は、このような会話を楽しむ余裕など全くなく、こうした場に自分がいることが苦痛で仕方なかったが、今このように穏やかな心を持ちながら他者と対話をしている自分が不思議であった。そこにこの五年間で自分の身に起こった変化の軌跡を見た気がした。

---

カフェテリアを後にし、自宅に戻る最中に通り抜けた公園は、どこか次の季節の到来を告げているような雰囲気を漂わせていた。この一年間のプログラムを通じての自分の変化を先取りするような、変化の兆しをそこに見て取ることができたように思えた。2016/9/7

### 363. カリキュラム再考

今日は、プログラム長のルートと一年間のカリキュラムの最終決定と論文アドバイザーの選定のための面談をした。論文アドバイザーに関しては、このプログラムに応募する前からサスキア・クネン教授に依頼をしており、彼女が私のアドバイザーを務めてくださることになっている。

フローニンゲン大学は二つのセメスターをさらに前半と後半に分けているので、実質上、ジョン・エフ・ケネディ大学の時と同じようにクォーター制のような形でカリキュラムが組まれる。最初のセメスターの前半と後半に履修するクラスは、ルートを含めた様々な教授陣がゲストレクチャーとして登場する「タレントディベロップメントと創造性」に加え、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授が担当する「複雑性と人間発達」の二つである。

次のセメスターでは四つのクラスを履修する予定なのだが、ここでルートから助言があった。フローニンゲン大学で私が探究を深めたいのはダイナミックシステム理論であり、もう一つにはダイナミックネットワーク理論というものがある。ルート曰く、二つの自由選択科目は全ての学科から履修することができるため、ダイナミックネットワーク理論について理解を深めたいのであれば、数学科のクラスは難解すぎるが社会科学のクラスならお勧めのクラスがある、ということであった。

また、ダイナミックシステム理論についてさらに探究を深めたいのであれば、「動的発達過程におけるマイルストーン」というクラスが第二セメスターの前半にあることを教えてくれた。このクラスに関しては以前からルートより話を伺っていたが、オンラインシラバスに掲載されていなかったもので、いつの間にか選択肢から外していたようであった。

もう一度キーワード検索でシラバスを確認すると、そのクラスはオランダ語で提供されている発達心理学のカリキュラムの中にあつた。シラバスを読むと、このクラスはオランダ語で提供されているものであり、もし英語での履修希望者が四名以上いれば英語でも開講する、という記載があつた。実

---

はこのクラスを担当するマライン・ファン・ダイク教授と「複雑性と人間発達」のクラスでクネン教授と共に教鞭をとるラルフ・コックス教授の研究には前々から着目していたのだ。

ファン・ダイク教授は主に子供の教育に関心を寄せており、研究の中にダイナミックシステム理論とカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用しているため、自分の研究アプローチと似たところがあるのだ。そのため、彼女から学ぶことは多そうだ、ということの前々から思っていたのである。また聞くところによると、心理学科の中でコックス教授がダイナミックシステム理論に関する数理的アプローチに最も習熟している、ということを目にしてきたため、彼から直々にダイナミックシステム理論の数理的アプローチの教えを受けたいと思っていたのだ。

そうした理由により、このクラスを是非履修したいという思いが高まり、開講にこぎつけるため、英語での履修希望者を今後リクルートしていこうと思う。ただし、このクラスを履修することができた場合に、一つカリキュラムから外さなければならないクラスが出てくるのだ。

それをどれにするかに関して思案していた。現在、自分の学術的探究活動に並行して、発達科学に基づいた人財開発コンサルティングサービスを日本企業に提供させていただいているという仕事もあり、仕事の関係上、どうしても産業組織心理学に関する二つのクラスを外すことはできない。

それゆえに、今のところ「知性・能力の発達とモチベーション」というクラスを泣く泣くカリキュラムから外す方向に傾いている。全体として、教育・ビジネス・スポーツの領域におけるタレントディベロップメントと創造性開発に関する最先端の研究と実践について学ぶクラスから始まり、ダイナミックシステム理論とダイナミックシステムアプローチに関する理解を深める二つのクラス、イノベーション創出と人間発達に関する産業組織心理学関連の二つのクラス、タレントディベロップメントに関するアセスメントのクラス、というカリキュラムに落ち着きそうである。

#### 364. 知性・能力の発達に関して注目する「ダイナミックネットワークモデル」

勉強したいという気持ち、研究を進めたいという気持ちを抑えることができず、今日は休日にもかかわらずいつもより30分ほど早く起床した。早朝のルーティンをこなしている最中、研究に関するアイデアが閃いたのでそれを研究ノートに書き記しておいた。今の私は確実に、フローニンゲンという街が持つ学術的な雰囲気やフローニンゲン大学の仲間達から非常に良い影響を受けているように

---

思う。一言で述べると、私という一人の探究者が、探究を加速させてくれる極めて質の高いネットワークの網の目に組み込まれており、ネットワークの一つの結び目としてそのネットワークと相互関係の関係を結んでいるような感覚なのだ。

人と人との結びつきや、人と組織の結びつき、組織と組織の結びつき、組織と社会の結びつきなど、この世の中は無数のネットワークで構成されている。私の中で、そうした「ネットワーク」というものがここに来て一つ重要なキーワードになっているようなのだ。振り返ってみると、今から十年近くも前になるが、学部生の頃に、経済政策を専門とされておられる山内弘隆教授の「ネットワーク経済分析」というクラスに強く関心を惹かれ、主に経済学や経営学の観点からネットワークについて学びを深めていたことを思い出した。その後の人生では、ネットワークをとりわけ意識するようなことはなかったが、ここに来て、人間の知性や能力の発達あるいは組織の発達におけるネットワークの重要性に着目し始めている自分があるのだ。

そのようなことに思いを馳せながら、昨日、博士課程に在籍中の友人であるドイツ人のヤニックの研究室を訪問した時、ネットワークについてあれこれと意見交換をした。ヤニックは現在、スポーツ選手のキャリアの中で停滞期と成長期を生み出すメカニズムの解明に「ダイナミックネットワークモデル」を適用している。特に、停滞期からの回復という「レジリエンス現象」を生み出す種々の変数間の関係性を探究するために、ダイナミックネットワークモデルを活用しているとのことである。

ダイナミックネットワークモデルという私にとっては新しい理論的・方法的枠組みについてヤニックと議論することによって、いろいろと気づかされることがあったのだ。ヤニックとの対話を終え、キャンパス内を散歩していると、記事341で書いた「問いと答えの連続的・非連続的発達過程」について、問いと答えは一つの動的なシステムを構築していると見て取ることはできないだろうか、という考えが湧いてきた。

つまり、問いという一つの変数(要因)と答えという一つの変数(要因)が互いに影響を与え合う一つの動的なネットワークを構築しているのではないか、ということである。そしてこのネットワークの特性は大きく分けると二つあるように思えたのだ。

---

一つは、問いと答えが上昇スパイラルを描くシナリオである。要するに、問いがあるから答えが生まれ、答えがあるから新しい問いが生まれる、という両者がお互いを強化し合うようなポジティブフィードバックを生み出す「自己強化型システム」という特性である。こうした自己強化型システムを持つ現象は私たちの身の回りに溢れているだろう。学ぶことが好きだから学び、さらに学ぶことによって学ぶことがより好きになる、という例が挙げられる。たくさん食べるから胃が大きくなり、胃が大きくなるからたくさん食べる、というのも一例だろう。

一方、問いと答えは下降スパイラルを描く可能性もあることを忘れてはならない。つまり、問いを立てないから答えが生まれず、答えが生まれないから新しい問いが立たない、というネガティブフィードバックを生み出しかねない「自己衰退型システム」の特性も持っていると思うのだ。

これまでの経験上、自己強化型システムの特性を持つ問いと答えの発達的変容サイクルが、私たちの知性や能力の発達を促す鍵を握っていると思っている。要するに、自己強化型システムを駆動させる出発点である問いを立てることをしなければ—あるいは問いが与えられなければ—、特定領域の知性や能力は決して高まらないと思うのだ。

例えば、自身のリーダーシップ能力の限界に悩み、それを伸ばそうと思う人には限界を乗り越えるための問いが必ず立つのではないだろうか。スポーツの世界においても特定の技術を高めたいと思う時には、どのようにすればその技術が高まるのか、という問いが必ず立つはずである。仮にそうした問いが生まれなければ、あるいは支援者から問いを与えられなければ、知性や能力は伸びないのではないかと思う。ヤニックが指摘していたように、ネットワークの構成要素は理論上無限にあるため、問いという変数を生み出す他の変数が存在している可能性があることをもちろん忘れてはならない。

しかし、下手をすると、問いがないから答えが生まれず、答えがないから問いが生まれず、という下降スパイラルの渦に巻き込まれてしまい、知性や能力がそれ以上育まれないという可能性があることには注意が必要である。

今日は早朝の九時からオランダ語の二回目のクラスがあった。火曜日と金曜日に行われる週二回のクラスはそれぞれ教室が違うので気をつけなければいけない。今日は法学部がメインとして使っている建物でクラスが行われた。

第一回目のクラスは簡単な挨拶表現のみを取り扱ったので、まだ文法に関する知識は一切なく、テキストの会話事例を読んでもよく分からない箇所が多々ある。そもそもオランダ語のアルファベットの発音の仕方が英語のアルファベットの発音の仕方と全く異なるものが幾つかあるため、英語を使用している感覚のままに単語の見た目からある単語を発音しようとすると、間違った音になることがしばしばある。そのため、今日のクラスでオランダ語のアルファベットの発音を習うことができたのは、次のステップへ進むために極めて重要であった。特に気をつけなければならないと思った音は「g」「h」「q」「r」「v」「w」「x」だろうか。

語学センターには多様な言語に関するクラスがあると以前紹介したが、そのため語学センターが提供しているクラスも多く、学生が建物を間違えないような工夫が施されていることには驚いた。具体的には、語学センターの受付がある場所から三本の異なる色の線が地面に埋め込まれており、事前のメールの中に、どの色の線に沿って道を歩けば目的の建物に到着するのかが記載されているのだ。この工夫のおかげで、携帯の地図とにらめっこしながら建物を探す必要は無くなり、容易に目的地に到着することができる——中にはそれでも迷って遅刻して来る生徒もいるが。

目的の建物に到着し、クラスが行われる教室に到着すると、まだ教室のドアには鍵がかかっており、何人かの生徒がドアの前で待っていた。その中に、ヨーロッパ言語の修士課程に在籍する中国人の友人であるシェンの姿を見つけた。昨夜から積み残しになっていた未解決の疑問点について、教室が開くまでの時間、シェンにあれこれと質問をしていた。シェンは言語を専門としているためだろうか、語学の習得に対してとても熱心であり、オランダ語に関するテキストや文法書のようなものをたいがい幾つか持参している。すでにオランダ語の文法規則や発音規則を彼はだいぶ掴んでいる、という印象を持ったので、積み残しになっていた箇所を質問すると、見事に全ての疑問点に明確に回答してくれた。シェンと私が早朝から熱心にオランダ語について廊下であれこれ議論している姿

---

を見ていた他の留学生たちは、「早朝からあの中国人と日本人は何をしているのだろうか？」というような眼差しで私たちを見ていたような気がする。

無事に教室に入り、授業が始まると、早速前回のクラスの復習を兼ねた口頭質問を教師であるリセットから受けた。生徒一人一人を指名し、オランダ語での問いに対してオランダ語で答えるというやりとりが始まった。私の番が来るまで他の生徒に対して投げかけられた質問に対して、自分もきちんと答えられるかどうかを頭の中で確認していた。一つ二つ即答できないものが混じっていた。私の番が来ると、「ヨウヘイ、あなたの氏の名前は？」「あなたは何語を話せるの？」という比較的簡単な問いだったので、スムーズに回答することができた。

前回の復習を兼ねた口頭質問が終わると、今日は本題の一つである人称名詞の主格と動詞の語形変化について習った。オランダ語の人称名詞の主格は英語のそれとは異なり、種類に富む。英語の“I”に当たる一人称の主格は“ik”であり、“you”に当たる二人称の主格の単数形は“jij”と“je”、それから丁寧な表現では“u”という三つである。二人称の主格に関して、最初のもは会話の中で相手を強調したい時に使う特別のものであり——“And you?”の場合など——、後者はそれ以外の状況において相手を指す時に使う。三人称の“he”に当たるものは、“hij”の一つしかないが、“she”に該当するものは“ze”と“zij”があるので厄介である。この二つの使い分けについてはまだ正確に理解していない。最後に、“it”に該当するものは“het”である。

“we”に該当する一人称の複数形は“wij(発音は「ヴェイ」)”と“we(発音は「ヴ」に近いと思う)”の二つである。英語における二人称の複数形は単数形と変わらず“you”のままであるが、オランダ語では“jij”と“je”は“jullie”という長たらしい単語に変貌を遂げる。三人称の複数形は全て“zij”か“ze”になる、とのことである。書き出すことによって明らかになってきたが、女性を表す“zij”と“ze”や一人称複数の“wij”と“we”の使い分けが不明である。相手を強調する時に“jij”を使ったのと同様に、“zij”や“wij”もその人称を強調する文脈で用いるのかもしれない。

人称名詞の主格を学習した後に、その流れを受けて、主格の変化に伴う動詞の語形変化を習った。改めて思ったが、英語の動詞の語形変化は、三人称の主格を用いる際に、動詞の語尾に“s”か“es”を付けるだけで事足りるように思う。しかし、オランダ語では主格の性質のみならず、動詞の性質によってその姿が変幻自在に変化するから厄介だ。もっともシンプルなケースでも英語の場合と

---

少し異なっている。例えば、「泣く」という意味の“huilen”を例にとってみると、一人称単数が主語の場合、“ik huil”となり、語尾のenを取る。二人称と三人称単数が主語の場合は、“jij huilt”や“hij huilt”となり、語幹の“huil”にtを付け加える必要がある——英語で言う、“s”や“es”を付ける感覚なのだが、オランダ語では二人称単数の場合にも変化させないといけない。そして、複数形は一人称・二人称・三人称を問わず、全て“huilen”となる。これが一番単純な動詞変化のパターンである。

ここからがさらに厄介なパターンが続く。教師のリセットの話をもとに戻してみると、例えば、“trekken(引く)”という動詞はどのように変化するだろうか？そもそもこの語幹は、-enを取り除いた“trekk”であり、一人称単数が主語の場合、“ik trekk”と表現したいところだが、これではダメだそう。オランダ語の動詞において、子音が語尾に二つ重なる時には子音を一つ取らないといけないというルールがあるそうなのだ。そのため、“ik trek”が正しい表現となる。二人称・三人称単数が主語の場合は先ほどと同じように、tを付け加える形で“jij trekt”や“zij trekt”と表現する。複数形は一人称・二人称・三人称を問わず、全て“trekken”となる。

語幹に子音が二つ重なるケースと同じように、語幹に母音が二つ重なるケースも同じように変化させる必要がある。例えば、“gaan(行く)”という動詞の語幹は“gaa”であるが、母音が二つ重なっているため、“ik ga”と表現する。二人称・三人称単数が主語の場合、“trekken”のケースで“jij trekt”と表現したように、“jij gat”としたいところだがこれは誤りとのことである。一人称単数の時に用いた“ga”にtを加えるのではなく、語幹の“gaa”にtを加えて、“jij gaat”としなければならないのだ。

これら以上に厄介なのは、動詞の形ではなく発音の特徴から判断して形を変えないといけないものがあるのだ。例えば、“weten(知る)”という単語の語幹は、enを取り除いた“wet”であるため、一人称単数が主語の場合、“ik wet”としたいところだ。しかし、これではダメなのだ。なぜかというところ、 “weten”という発音は、強引に日本語で表現すると「ヴェーイトウン」となり、長音単語なのだ。仮に“wet”としてしまうと、長音のニュアンスが消えてしまうため、長音にするために母音を付け足してあげる必要があるのだ。そのため、“ik weett”が正しい表現となる。二人称・三人称単数が主語の場合は先ほどと同じように、tをつけたくなるが、“weett”としてしまうと、動詞の語尾に二つの子音が

---

来てしまうため、この場合はtをつけず“jij weet”というように一人称単数が主語の場合と同じになる。複数形は一人称・二人称・三人称を問わず、全て“weten”で良い。

ここまでのところすでに頭が混乱しそうであるが、もう少し話が続く。例えば、“schrijven(書く)”という動詞はどうだろうか？語幹はenを取り除いた“schrijv”である。そこで教師のリセットからある生徒に質問が飛んだ。

リセット:「それでは、イリアーナ、『私は書きます』というのはどう表現できると思う？」

イリアーナ:「“ik schriv”ですか？」

リセット:「残念。それはロシア語のように見えない(笑)？」

イリアーナ:「確かに(笑)！」(ロシア語に少しでも馴染みのある生徒たちは爆笑、少しもわからぬ私は苦笑)

リセット:「オランダ語では、動詞の語幹の語尾がvで終わる時、それを変化させようとするときfに変わるのよ。なので、正しくは“ik schrijf”となります。」

一同:「おお～！」

リセットが共有したロシア語のくぐりやわかるようなわからないような例えであったが、動詞の語幹の語尾がvで終わる時はそれをfに変える必要があり、同様に、動詞の語幹の語尾がzで終わる時はsに変化させるという一手間を加えてから主語に応じて動詞の形を変えていく必要がある、とのことであつた。上記の例で言えば、二人称単数が主語の場合、“jij schrijft”となる。

最後に最も複雑なケースを紹介したい。“lezen(読む=read)”の場合はどのように変化するだろうか？ちなみにこの語幹は“lez”である。zで語尾が終わるため、“ik les”としたいところである。だが、この単語は日本語で発音すると「レーイズン」というように長音発音なのだ。そのため、単にzをsに変換するだけではなく、母音を重ねる必要があるのだ。そのため、“ik lees”となる。非常に厄介な変化である。

---

これはまだ主格に応じた動詞の変化でしかないので、ここから過去形や過去分詞形になるとどのように変化するのか今から興味が湧いている。今日はおそらく主格に応じた動詞の変化パターンを全て教えてもらったと思うので、あとは不規則な語形変化のルールをしっかりと頭と体に叩き込み、慣れが必要だと思った。

さらにクラスの後半ではオランダ語の数字表現について習った。英語を習いたての頃を思い出していただくと、三桁を超える数字表現に最初は手間取った経験はないだろうか？自分で数字を表現することや相手が表現する数字の聞き取りが最初は難しかったのではないかと思われる。オランダ語でも同様の苦しみを今経験している。発音が独特なものが混じっているだけではなく、二桁の数を超えると奇妙な言い方をしないとイケない点がややこしい。

例えば、「34」という表現をする時、日本語では「さんじゅうよん」と言えばいいし、英語では“thirty four”と左から順に数を表現すればいい。しかしながら、オランダ語では違うのだ。オランダ語では“vierendertig(よんとさんじゅう:four and thirty)”と言わなければいけないのだ。これも慣れが必要である。この点を紹介しながらようやく気付いたのは、オランダ語にはどうも小さな数字から先に表現するという慣習があるらしい。

各種の文書に日付を記載しないとイケないことがこれまでに何回もあり、一瞥するとオランダは一年12か月で回っているのではなく、31か月で回っていると勘違いしてしまうかもしれない——常識的にそんなことはないとすぐ気づくだろう。つまり、日本語では2016/9/13と表現し、英語(米国)では9/13/2016と表現するところを、13/9/2016と表現するのだ。これを見たとき、13月だと勘違いしてはならず、日月年の順に並んでいることを理解しておく必要がある——そう考えると日本語では年月日という順番だが、米国ではなぜか月日年という変わった並び方なのだ。ここにも何かしらの文化的・歴史的背景があるかもしれない。

いずれにせよ、本日も興味深いことを数多く習った。今日習った語形変化をきちんと身につけるために、この二回のクラスで習ったごく少数の単語を駆使しながら自分で文章を作成し、それを音読するというのを繰り返し行いたい。

---

### 366. 閉鎖系システムから開放系システムへ向かって:他者からの刺激と促進

正直なところ、この数年間を振り返ってみると、私はひどく閉じた世界の中で探究活動を行っており、他者から何か刺激や促進を得ることに対してそれほど積極的ではなかったと思われる。この背景にはもしかすると、年齢を重ね、さらには自分の専門性を徐々に確立していくと、それが自己を閉鎖系のシステムにしかねない、という可能性があると思わされた。今の私に要求されているのは、再び自己を開放系のシステムにすることなのかもしれない。

人間の知性や能力は本来開放系のシステムだと思うが、自分の専門性を高めることだけに躍起になっていると、いつの間にやら自己が閉鎖系のシステムに変化してしまい、世間一般によく言われるような、他の専門領域を行き来して共同作業のできない不自由な専門家になり果ててしまうだろう。おそらくフローニンゲン大学に私を導いた存在は、私自身をもう一度ここで大いに開放させることを内側から促しているのだと思う。

自己を再び開放系システムにすることの一環として、今日は午後から、先日の奨学金授与セレモニーで知り合った元JALのCAであるタイ人のアイとキャンパス内のカフェで色々話をしていた。JALのCAから国際法の修士課程に至った経緯に関心があり、公共国際法という彼女の専門領域についても関心があった。

挨拶もそこそこに会話はまず、曜日は違うがお互いに履修しているオランダ語のクラスについて話題となった。

私:「オランダ語のクラス、どう？」

アイ:「そっちはどう?(笑)」

私:「やっぱり、難しいよね(笑)。特に発音の仕方がまだイマイチ呑み込めてないかな～」

アイ:「うん、同じね。週二回のオランダ語のクラスを除くと、専門のクラスが三つもあるから色々大変で・・・。」

---

私:「えっ、専門のクラスを三つも履修してるの？僕は今学期は一つだよ。しかも来週からようやくスタート(笑)。」

アイ:「それは楽ね～(笑)。私ね、このプログラムを修了したら、デン・ハーグの国際司法裁判所でインターンをしようと思ってるの。」

私:「おお、国際司法裁判所？そこは10歳から高校卒業時まで働きたいと思ってた場所だよ！」

アイ:「10歳の時？早すぎね(笑)。いずれにせよ、国際司法裁判所で働くにはどうも英語とフランス語が必要みたいで、フランス語も学ぶ必要があるのよ・・・。」

私:「そうなんだ・・・。フランス語も必要なんだ・・・。今学期、オランダ語のクラスを含めると合計五つのクラスがあるわけでしょ？そこにフランス語はきついよね。」

アイ:「うん。だからまた来学期・・・来学期も専門のクラスが三つあるから(笑)、フランス語は次の Semester にしようと思ってるの。そういえば、初めて会った時にも思ってたんだけど、ヨウヘイは日本人っぽくないよね。」

私:「ん？顔？」

アイ:「顔じゃない(笑)。一つには、英語の発音ね。日本人独特の訛りがない感じがする。」

私:「本当？今もまだ少しあると思うけど、四年間の米国生活でだいぶ訛りが抜けてきたのかもしれない。五年前は本当に酷かったよ(笑)。アイの英語も訛りが全くと言っていいほどないよね？」

アイ:「私も米国で生活をしていたことがあって。高校生の時に一年間ほど。四年間も米国にいたのね。どうりであの日本人独特の・・・、なんて言ったらいいの・・・あの感じの発音じゃない・・・」

私:「何が言いたいかわかるよ(笑)」

---

アイ:「わかるでしょ(笑)。あと、CAの時に多くの日本人乗客と会ってきたけど、話の受け答えが全然違うわね。ちゃんと目を見て話すし、先日も気づいたけど、人に譲るような心のゆとりを持ってるとね〜。そのあたりに西洋化されているのを感じたわ。」

私:「ありがとう。昨年一年間東京にいたから、人に譲る心を忘れ、せっかちな感じに戻りつつあったけど(笑)」

このようなたわいのない会話をした後、アイの専門分野である公共国際法を含め、彼女が所属しているプログラムについて色々と話を聞いた。彼女のプログラムも私のプログラムと同様に総勢18名ほどらしく、非常に知的な同僚たちに囲まれて少し焦りを感じている、ということを知り、彼女から聞いた。彼女はタイで法学学士を取得しており、その時にあまりにも法律漬けになったため、人と関わるCAの仕事を選んだそうだ。

CAとして勤務をしている時に、機内で人命救助をするという滅多に遭遇しない経験をし、その経験がきっかけとなり、人を救うということ、再び法律の観点から人を支援するということに関心を持ったためこの大学に来たのだ、ということを知り、彼女のストーリーと自分のストーリーはどこか共通するものが少なからずある、と思わされた。

また彼女が感じていると述べた焦りに関しても、私も久しぶりに他者を見てもっと勉強しなければならぬと感じる日々を送っている。基本的に成人を迎えてから、他者を比較基準として学習を進めることなどこれまでほとんどなかったのだが、他者を見て「このままではまずい」という若々しくもあり、学習に私を駆り立てる激しいエネルギーが伴った、あの懐かしい感情が自分の中に湧き上がっているのを感じるのだ。

もしかしたら、いつまでも学び続けようとする人には、この種の青々とした澁刺なエネルギーが流れ、それがどこか若さを保つような、いやより正確には、生命力をより高めることにつながっているように思えるのだ。

アイとの一時間半ほどの談笑を終え、自宅に帰る道すがら、明日から週末を迎えることに気づき、学術論文と専門書を読み耽ることのできる贅沢な時間がやってくることを思うと、至福さを抑えること

---

が難しかった。閉鎖系システムから開放系システムへと自己変容することを支援してくれる友人の存在に対してとても感謝している。

### 367. 記憶の秩序体

昨日の正午、近所のスーパーに買い物に出かけた時、昼の盛りとは思えない柔らかな太陽光に私は包まれていた。緯度の高いオランダの太陽光は、これまで経験してきた太陽の光とは別種のものであると気づかされた。この太陽光は白昼夢を見ているかのような感覚を私に覚えさせる。

一匹の猫が木々の隙間から太陽を見つめている。木漏れ日とその猫に降り注いでいる。その猫は終始太陽の方向を見上げている。その猫が首を傾けているのと同じ角度で、私も空を見上げた。そこには雲一つない青空と柔らかな光を放つ太陽があった。真昼のはずなのに、真昼とは思えないような何とも不可思議な気持ちのまま買い物から自宅に帰ってきた。

そのような出来事があった翌日の今日、朝からまばらな雨が降っていた。なぜだか私は嬉しい気分になっていた。ここしばらく雨が降らない日が続いていたため、雨が恋しくなっていたのかもしれない。いや、そんなことはない。

ロサンゼルスに住んでいた一年間において雨などほとんど降らなかったが、雨が恋しくなることは決してなかった。どうやらそこには違う理由があるようであり、どうも昨日の白昼夢のような感覚を洗い流したい、というような思いが自分の中にあっただからではないかと思ったのだ。

窓の外から空を見ると、西の方角には薄い雨雲がかかっており、東の方角には雲がそれほど多くない晴れを思わせる空が広がっている。しとしとと降り注ぐ雨は、私の心と身体にまわりついてきた柔らかな衣をゆっくりと脱がしていった。そのおかげで、再び現実世界に戻ってきたかのような感覚になり、雨にもかかわらず爽快な気分になったのだ。

そうした気分の中、また取り留めの無いことに思いを巡らせていた。特に今に限ったことではないのかもしれないが、それでもここ最近、過去の記憶を手繰り寄せることが非常に多くなってきている。過去の記憶を現在に折りたたみ、未来に向けて再構成するような運動が絶えず自分の中で起きている気がするのだ。

---

そういえば、人間の発達において記憶がどのような作用を果たすのかについて、これまでそれほど関心を払ってこなかった。記憶というものが体験や経験と密接に関わっている以上、記憶が私たちの発達に果たす役割は大きいのではないだろうか。

もしかしたら、絶えず今を創造していくための素材として過去の記憶が必要になっているのかもしれないと思った。手繰り寄せることのできない記憶は抑圧されてしまったものなのか、それともすでに自己に統合されてしまったが故に思い出すことができないのか。

昨夜、記憶の貯蔵庫に降りていき、遡れるだけの記憶を全てゆっくりと呼び起こし、なるべく時間軸に沿った形で並べ替えようとした。しかし、その並び替えは上手くいったとはあまり言えず、時間が飛び飛びになった記憶をとりあえず大きな物語の中で位置づけていくことにした。

バラバラの記憶を一つの物語の中に位置付けることによって、記憶の秩序体が出来上がっていく感じがした。ダイナミックシステム理論の観点からすると、人間が発達する際には、必ず混沌とした状態から秩序を生み出す運動が見られる。

出来上がった記憶の秩序体は、どこか発達プロセスを象徴するもののように思えた。

### 368. 個人と組織の発達に関する新たな理論モデル「ダイナミックネットワーク理論」

フローニンゲン大学でダイナミックシステム理論に関する経験豊富な研究者や実務家から直接教えることに伴い、ただただ嬉しい意味での驚きに包まれている。この一年間の小さな目標は、これまで培ってきた構造的発達心理学の言語体系を一旦手放し、新たな言語体系を内側に構築していくことである。

新たな言語体系というのがまさに、ダイナミックシステム理論である。これまで独学を重ねる中で培ってきたダイナミックシステム理論に関する理解には、極めて重要な視点、非常に重要な理論的枠組みが自分には欠けていたと痛感させられている。

それは「ダイナミックネットワーク理論」と呼ばれるものである。「タレントディベロップメントと創造性発達」のコースを担当するルート・ハータイ教授の共著論文“A dynamic network model to explain

---

the development of excellent human performance (2016)”を読んだ時、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論に触れた時と同じような斬新さと洞察に驚かされた。

人間の知性や能力の発達に関して、歴史を遡ればジョン・ロックやジャン=ジャック・ルソー、あるいはそれ以前の思想家が、「氏か育ち」という切り口から論争を繰り広げてきた。科学的な研究では、1869年にイギリスの遺伝学者フランシス・ゴルトンが遺伝特性の重要性を指摘した研究成果を発表し、時を同じくして、スイスの植物学者アルフォンス・ドゥ・カンドールが教育などの環境的要因の重要性を指摘した研究成果を残している。そして、構造的発達心理学者でおなじみのローバート・キーガンも、「課題と支援」の重要性を強調しており、これはどちらかという環境要因の重要性に該当するだろう。

さらに近年では、三つ目の視点として思慮に満ちた実践を長く継続させることの重要性に関する研究成果を、スイスの心理学者アンダース・エリクソンが発表している——アンダース・エリクソンの研究成果は「一万時間の法則」として有名であり、彼の研究成果をジャーナリストのマルコム・グラッドウェルなどがよく引用していることでも知られる。

これまでの私は、それら三つの要因が知性や能力の発達を促すものだと思い込んでいたし、それら三つの視点を用いて説明すればほぼ網羅的に発達要因について説明できるかのような感覚に包まれていた。しかし、ある時から、何か釈然としないものを感じていたのだ。ルートの論文を読んで考えさせられたのは、それら三つの視点は、結局のところ、知性や能力が発達するための多様な要素を列挙しているだけにとどまり、私が漠然と思っていたそれら三つの要素の動的な相互関係を明らかにするものではないのではないか、と思ったのである。

要するに、これまで信奉されてきた上記三つの要素が依然として知性や能力の発達に重要な役割を果たすことに変わりはないのだが、複雑性科学を取り入れつつある最新の発達科学の研究領域では、発達に影響を与える要素を抽出することに留まらず、それらの要素がどのような関係を通じて相互的な影響を与えているのか、つまり、動的かつ複雑なネットワーク関係に焦点を当てた研究が着目され始めているのである。

---

この研究領域は、個人と組織の発達に関する非常に重要な点に着目していると思うのだ。個人と組織の発達を支援するときに、これまでの私は「要素中心的」なアプローチを採用していたように思う。つまり、発達のトリガーとなる要素を特定し、その要素に働きかけるようなアプローチの仕方である。

しかしながら、この論文を読んで考えさせられたのは、「関係中心的」なアプローチの大切さである。要するに、個別の要素に着目するというよりも、複数の要素が生み出す動的かつ複雑なネットワークに着目し、要素に働きかけるというよりも、要素で構成されるネットワークに対して働きかけるアプローチの重要性に気付かされたのだ。

アメリカの思想家ケン・ウィルバーの提唱したインテグラル理論をこれまで何年にもわたって学びを深めてきたにもかかわらず、ウィルバーが警鐘を鳴らす要素還元的なアプローチで個人と組織の発達を捉えていたこれまでの自分を反省せざるをえない瞬間に立ち会うことができたのだ。発達に影響を与える数々の要因が生み出す動的かつ複雑なネットワーク関係の生成メカニズムに焦点を当てる「ダイナミックネットワーク理論」は、発達研究においても、個人と組織の発達を支援する実務の世界においても、見逃すことのできない洞察を私たちに提供してくれると思っている。

### 369. 想い

就寝することと起床することが極めて難しい日々を送っている。今日という一日の中に込められた意味の粒子を振り返った時、その粒子が持つ密度に圧倒されてしまう自分があるのだ。そして、自分を圧倒するような密度を持った粒子が今日という日に存在したということ、その事実に感激する気持ちと今日という一日を心から惜しむ気持ちを抑えながら就寝することは難しい。また、明日という日がどれほど単調なものであったとしても、明日という日がやってくることを待ち遠しく思う気持ちを抑えながら一日を終えることは難しいのだ。

起床の際、今日という新たな一日がまた始まったという事実を受け止めることが難しい。そして、新たに始まった今日という一日の中で自分に届けられる意味の粒子を掴み切ろうとする、破裂してしまいそうな感情を抑えながら起床するのは実に難しいのだ。

今、私はフローニンゲンという新天地で生活を送っている毎日に形容しがたい感謝の念を抱いている。一人の人間の毎日が、これほどまでに充実したものとなり、生の充実の中で生きる時、一人の人

---

間の思考・感情・感覚というものがこのような色彩と質感を持つのか、ということに対して驚きを隠せない。

今の私は日々ギリギリのところでは生きているのだと思う。特に、学術探究の領域において、通用するか通用しないかのギリギリの瀬戸際に立たされながら毎日精進している自分がある。それぐらい、教授陣のみならず周りの同僚たちが優秀なのだ。

このように、瀬戸際に立たされながら毎日淡々と誰も見ていないところで、自分が磨き続けるべきものをただひたすら磨き続けることの中に現れる玉虫色の感情が自分を襲うのだ。なぜ自分はいつも列の最後尾に置かれた時に、絵も言えない高揚感を覚えるのだろうか。こうした何とも表現しがたい高揚感は幼少期の頃に頻繁に味わってきた。それと似た感情が今の自分の中にある気がしている。

「瀬戸際に立たされる」という比喩表現の中にはどうも、これまでの自分と次なる自分の境界線という意味が内包されており、そこには不可避に現在の自己の死を暗示させる感覚が込められている気がする。フローニンゲンで生活を始めて以降、自分の感覚が鋭敏なものとなり、人間本来の根源的な生命力を爆発させようとする影には、やはり現在の自己の死というものが目の前に差し迫ったものとして絶えず突きつけられているのではないか、と思う。

今の自分には、現在の自己の死を悲愴がる気持ちも、新たな自己の誕生を祝福するような気持ちもない。そこにあるのは、一日の生の充実さの中で生じる玉虫色の感情に包まれながらも、その感情に埋没することなく、ただひたすらと自分の仕事を続けていくこと、この一点に尽きるのだ。

フローニンゲン大学での学術生活の中で、今の私は自分の知識を拡張させることには関心が一切ない。確かに、自分の専門分野に関する知識を蓄積していくことは重要でありながらも、強い関心を持っているのは、フローニンゲン大学がまさに体現しているように、学術生活の中で自分の存在をかけて獲得した知識を他者・組織・社会へ還元していくということである。

これまで講義を受けた中で、各教授陣が知性や能力の発達に関する学術的成果を国家レベルの政策にまで落とし込んでいる姿を目の当たりにし、また、多様な領域の組織に対して研究成果をも

---

とにした仕組みづくりを積極的に提言している姿を目の当たりにし、より一層、一個人の中に知識を単に蓄えることの無益さを痛感させられているのだ。

そうした意味で、「関与」という言葉が私の中で鍵を握る。やはり、私は日本に関与し続ける形でしか生き続けることはできないし、それを止めてしまいたくないと心の底から思う。そうした関与を実現させるためには、私はこれから長大な時間をかけて自分の仕事を一つ一つ進めていく必要があるのだ。

そして、自分の仕事を一步一步進めていくためには、既存の充実感という感情を一周させた後に生まれてくる、今この瞬間に感じている超越的な充実感の中で生きる必要があるのだ。そのような生き方を私がしていくためには、母国を離れた場所で生き続けながら仕事を進めていかなければならないのである。

母国に関与しようという気持ちが強まれば強まるほど、自分は母国へ戻れなくなってしまうのだ。もう二度と母国で生活をすることはないかもしれない、という背中をひた走ったあの直感は、自分の一生を捧げてでも母国へ関与しようという想いの表れだったのかもしれない。2016/9/10

### 370. 学ぶ喜びの感覚質

一昨日は自分の中で燃え盛る情動と向き合うことが非常に難しかった。それは自分の中の全てを溶かしてしまうかのような力強さを持った情動であった。こうした情動は、自分の中の経験を発酵させることにどのような影響を及ぼすのだろうか。

経験を自らの思想にまで高めていくためには、経験を徐々に時間をかけて熟成させていくことが大事だと思うのだ。そう考えると、一昨日のような炸裂するような情動は経験の熟成過程に好ましい影響を与えないのかもしれない。しかし、そうした激烈な熱気を感じるというのも私の一つの経験に他ならず、それが過ぎ去った今、残り火を用いながらこの経験を静かに熟成させていく必要があるだろう。

昨日は、水曜日に行われる「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの課題図書を読むことに多くの時間を充てていた。このコースは全七回のクラスで構成されており、各クラスのテー

---

マごとに異なる教授がレクチャーを担当することになっている。例えば、スポーツ、企業組織、教育、アセスメントなどの切り口からタレントディベロップメントと創造性や卓越性の発達を取り上げていく。

初回のクラスは、私が所属するプログラムを取りまとめ、このコースのコーディネーターでもあるルート・ハータイが担当する。ルートは主に、スポーツにおける知性や能力の発達を研究テーマとしており、七回のクラスの内、初回以外にも途中でもう一回クラスを担当する。

プログラム長であるという気概からだろうか、あるいは自分の研究領域に関する情熱からだろうか、ルートが担当する回の課題図書は他の回よりも圧倒的に分量が多い。そのため、昨日は特に多くの課題図書と向き合う必要があったのだ。

必読文献のみならず、捕捉文献に記載されている全ての書籍と論文を無事に読み終えたところで、休憩としてオランダ語の学習に移った。外国人である私がオランダ語をどのように学んでいるかという、やはりオランダ語をオランダ語のまま学んでいくことは不可能なので、オランダ語を英語に翻訳しながら学習を進めている。

こうした作業を進めながら思うのは、オランダ語を英語に翻訳しながら理解していくことによって、英語の語感覚も磨かれていくような気がするのである。私たちの言語空間は非常に面白い性質を持っており、ある言語が幅と深さを獲得し始めると、他の言語の幅と深さにも好影響を与えるのではないかと、思っている。

もちろん、バイリンガルの年齢が若い場合、例えば、英語を学ぶことを強制させられた日本人の子供達が、日本語の能力を伸ばすことに苦戦してしまうことなどが起こりうるだろう。この場合、英語の言語空間が日本語の言語空間を圧迫してしまい、日本語力の発達を阻害するような現象が起きているのである。それはさながら、捕食者と被食者の関係性に似ている。

一方、成人期を超えた私の場合に限って言うと、複数の言語が互いに干渉し合うことなく、それとは正反対に、相互に好影響を与えながら言語空間の幅と深度を発達させているようなのである。年齢に応じて、言語空間という生態系の性質に変化が生じるのを見て取ることはできないだろうか。言い換えると、年齢に応じて、言語空間という大きな生態系の中にいる生物種である各種言語の関係性が変化するのである。

---

---

現在、私の言語空間という一つの大きな生態系の中には、日本語、英語、オランダ語という三つの生物種が主に存在しており、それら三つがお互いに干渉し合うのではなく、相互にお互いの土壌を涵養していくような関係性が構築されているのを実感している。そのため、オランダ語を学べば学ぶほど、英語の言語空間の性質が変容し、同時にそれは日本語の言語空間の性質の変容を促進しているのである。そのようなことを思わされた。

また今日の学習の中で、客観的に見れば全く大したことではないと思うのだが、何度も失敗を繰り返しながら初めてオランダ語で1から20まで暗唱できた時、隠しようのない喜びが自分の中で湧き上がっているのを感じていた。これは紛れもなく学びに伴う純粋な喜びであろう。小さなことを達成した時に湧き上がるそうした喜びを素通りすることなく、一つ一つ噛み締めていくことが、自分の学びを一つ一つ前進させていくことにつながるのだと思うのだ。

幼少の頃、日本語で数字を数えることを学んでいた時に、「八つ」「九つ」を正しく表現することに対する苦戦を乗り越えて、初めて1から10まで日本語で数えられた時のあの喜びとオランダ語で1から20まで数えられたこの喜びの間には、何らの差もないことに気づいたのだ。どちらの喜びも、夏真っ盛りの時期に収穫される柑橘類の色と味のようなようだったのだ。

大人になるにつれ、私たちは学びに伴う純粋な喜びを忘れがちになる。成熟するにつれ、喜びという感情に付与される意味はより重層的なものになっていくのかもしれないが、喜びの核にある感覚質は常に等しいものなのではないかと思うのだ。

季節はもう秋に入り始めている。しかし、夏を彷彿させるような柑橘類の色と味を伴った学びの喜びを絶えず感じていたいと思う。

### 371. 重力と波

フローニンゲンの夕方の空に、くっきりとした形を持つえんじ色の太陽が沈んでいくのが見える。昼間は自分が意識しないところで世界を照らしている太陽をこのように自覚的に眺めていると、この世界にあのような強烈な光を放つ物体が存在していることに驚きを隠せない。

---

その太陽が、窓から見える視線の先のはるか彼方の西の地平線に沈んでいくのが見えた。その地平線は紫色を帯びたえんじ色に彩られていく。太陽が西へ沈んでいくのを目撃した時、太陽が動いているのではなく、地球が太陽の周りを動いていることにはたと思い出した。そして、この運動を引き起こしているのが私の目には見えない「重力」と呼ばれるものであることに対して、神妙な気持ちにならざるをえなかった。

今日という一日も終わりに近づいている。今日の私の探究を動かしていたものは、私という小さな存在というよりも、何かこうした太陽のような存在があるのではないかと、思わざるをえなかった。そして、そうした存在と私との間には、重力のような目には見えない力が働いているのではないかと、想像せざるをえないような気持ちだったのだ。

やはり、ここ数日間は高波に乗っていた自分がいたようだ。と言うのも、昨日は普段の分量を逸脱する形で探究活動に従事してしまったようなのだ。学びの量が過多であったため、それを自分の中で整理・消化させるのに普段よりも一時間半多い睡眠時間を必要としたのだ。

現在は止めているが、昨年までの数年間、毎日どのような分野にどれだけの探究時間を割いているのかをエクセル上にデータとして残していた。そのデータを年間を通して眺めてみると、もちろん探究時間には波があるのだが、平均すると毎日十時間ぐらいの探究時間になっていることがわかった。

定量的な側面と定性的な側面の両方を勘案すると、一日に九時間の探究時間では全く物足りない自分がある一方、一日に十二時間を超えるとそれは自分にとって大きな負担になることがわかってきた。昨日はどうやら、十三時間を超える形で机の前にへばりついていただようなのだ。

そういえば、先週末のランニングの際にも、新しいコースに乗り出していき、膝に負担がかかってしまうぐらい走っていた自分がいたのである。自己管理というのは実に難しいものだと思わされる。私の中で特に重要視しているのは、残りの人生の間中、自分の仕事を継続させていくことにあるため、こうした一時的な負荷とどのように付き合っていくのかを考える必要があると思う。

いかに一定の量で一定のペースで探究を継続していこうと思っても、人間の学習プロセスは非連続的な特徴を強く持っているため、必ずや平均を逸脱した異常値に今後も絶えず直面すると思う

---

のだ。自分や外側から異常値を招き入れるのではなく、異常値の側から自分にやってきた場合には、そうした異常値と比較的良好な関係を結ぶことができるのかもしれない。

昨日は何も、十三時間にわたる探究活動をしようと思って一日を始めたわけでは決してない。結果として、探究時間が十三時間に達していた、というだけの話であり、自分からこのような探究時間を設定して探究を始めたり、外側から強制させられていた場合には、自分の学習曲線が描く軌跡に対して悪影響を及ぼしていたのではないかと思う。

とりあえず今は、異常値の側から自分にやってくる現象を一種の生理現象とみなし、それを特別のものともみなさないような考え方が必要なのだろう、と思っている。

### 372.思想や哲学

気がつけば九月も終わろうとしている。早いもので、フローニンゲンで生活を始めてから二ヶ月が経とうとしていることにふと気づかされた。十月が近づいてくるにつれ、フローニンゲンの街も徐々に寒くなり始めている。早朝の起床は、太陽が昇るよりも早くなってしまった。薄暗闇の中、今朝も太陽より早く起床し、早朝から探究活動を開始させた。

現在履修している「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースのおかげで、数年ぶりに産業組織心理学の論文を読むことになった。振り返ってみると、私が師事していたオットー・ラスキーが構造的発達心理学と産業組織心理学を横断するような学術論文を執筆しており、それを読んで以来のことかもしれないと思う。

本日読み進めていた論文は“Talent-Innate or acquired? Theoretical considerations and their implications for talent management (2013)”である。このコースを履修することを通じて、「才能」と呼ばれるものに関する理解が促進させられているのを感じている。

人間の才能に関する過去の学術研究を網羅的に学ぶことだけに留まらず、自分自身の体験や経験を振り返りながら、人間の才能について深く考える機会を得ているのだと実感する。この論文は、人間の才能が所与のものなのか開発されるものなのか、あるいはその両方なのか、と言う古典的な

---

テーマを理論的に整理しながら、企業組織がタレントマネジメントのためのシステムをどのように構築していけばいいのか、という実務的な提言まで踏み込んで行っている。

社会科学系の論文は基本的に、研究対象とする現象の発生メカニズムの解明に焦点を置き、発見事項から実務的な提言につなげていくことを極力控えている印象がある。そのため、そうした学術論文ばかり読んでみると、どうしても現象に対する概念的な知識のみが肥大化してしまい、実務の世界への応用を考えることを怠ってしまう自分がいるので注意が必要である。

興味深いのは、ひたすら科学的な学術論文ばかり読んだ後の自分の内側の感覚と、ひたすら哲学的な専門書を読んだ後の自分の内側の感覚との間には、歴然とした質的差異があるのである。どちらに対しても真剣に向き合った場合に限ると思うが、前者が知識基盤の拡張をもたらす感覚であり、後者が思想基盤の拡張をもたらす感覚である。

知性発達科学者として、私の主な仕事は人間の知性や能力の発達に関する科学的な探究を行うことにあり、実務家としては、そこで得られた知見を企業組織や教育という領域に還元していくことにあると考えている。実務家としての側面を捨てきれないのは、これは私の最初のキャリアが企業組織を相手とするコンサルティング業であったことと密接に関係しているのかもしれない。

研究大学と謳っているフローニンゲン大学では、その名にふさわしく科学者養成のための非常に体系的なトレーニングが提供されている。こうしたトレーニングを受けるにつれ、科学者としての本業は既存の知識体系を網羅的に理解した上で新たな知を生み出していくことにあるのだが、そこから実務家として、既存の知と先端の知を単純に備えた状態で実務の世界に関与していくことに対して疑問を呈する自分がいるのだ。

つまり、企業組織という領域にせよ、教育という領域にせよ、実務の世界の中で戦略や仕組み、政策を立案していく際に、既存の学術的な知を網羅的に理解し、最先端の知を携えているだけでは、全くもって通用しないのではないか、と思う自分がいるのだ。直感的に、そうした知識基盤というのは生命の外形であって、生命を真に動かす生命力ではないような気がしているのだ。

私の中では、そうした生命力に該当するようなものが思想や哲学と呼ばれる類のものなのではないかと思っている。こうした思想や哲学は、戦略・仕組み・政策の中では目に見えるものとして現れて

---

---

こない。だが、思想や哲学が戦略・仕組み・政策の生命力として機能しているのであれば、私たちはそれを蔑ろにしてはならないと思う。

一人の科学者として、一人の実務家として、やはり思想や哲学を深めていく試みを止めてはならないのだと痛切に感じる。

### 373.オランダ語による「スピードデート」

今日は第三回目のオランダ語のクラスがあった。早朝の習慣となっている種々の実践の中にオランダ語のシャドーイングを導入しようと思っている。普段の生活を送るだけではオランダ語を聞いたり話したりする機会は少ないため、シャドーイングを行うことを早朝の習慣としたい。英語のシャドーイングの所要時間と同じく、10分を目処にこれから毎日継続させようと思う。

お昼前にクラスが終わり、帰宅しようとしている道すがら、秋を感じさせる柔らかな太陽の光がレイディーブ河川を照らしていた。私は橋の上で立ち止まり、柔らかな光の差す方角を見た。そこにはアー・ケルク教会が静かに佇んでいるのが見えた。

このなんとも形容しがたい秋のほのかな朝の空気と太陽を感じながら、私はしばらくアー・ケルク教会を橋の上から眺めていた。11時を知らせる鐘の音が鳴り渡る。私にとってそれは、特定の時刻を告げる音というよりもむしろ、何か別のことを私に告げているような音に聞こえた。

オランダ語のクラスが終わるといつも不思議な感じがする。思考がオランダ語から英語に戻ると、爽快感と共に安心感に包まれる。ぎこちないオランダ語の空間に長くさらされているわけであるから、それは当然かもしれない。クラスの帰り道は、今日のクラスで習ったオランダ語表現をブツブツとつぶやいていたり、英語で今日のクラスの内容を振り返っている自分がある。帰宅後には、このように日本語で今日のクラスを振り返るという流れが構築されている。記憶が新しいうちに、今日のクラスの内容を振り返っておきたい。

今日はクラスに到着すると、週末明けのなんとも言えない雰囲気があるのを察知した。それは新しい週が始まることに対する新鮮な気持ちが充満した雰囲気と言ってもいいだろうし、これから今週を過ごしていくために気持ちを高めている最中の雰囲気といってもいいだろう。そんな中、

---

ヨーロッパ言語の修士課程に在籍する中国人の友人であるシェンが隣に腰掛けたので、彼に話しかけてみた。

私:「やあ、シェン。週末はどうだった？」

シェン:「やあ、ヨウヘイ。週末？全て勉強に返上だよ(笑)」

私:「うん、同じだね(笑)」

履修コースが少ないとはいえ、自分の関心事項に従って探究を進めていると、休日も関係なく学習を進めている自分がある。コースの課題図書と参考図書を全て読み終わり、関心の赴くままにコースとは関係のない文献を読み進めていくことが私にとっての何よりの休息であるし、それが至福の時間でもある。分野は違えど、シェンもそうなのだろう。

クラスが始まると、まずはお決まり通り前回の内容の復習からスタートした。前回習った項目の中でも特に重要なのはオランダ語での数の数え方である。教師のリセットが、一人一人順番に数を数えていくエクササイズを提唱し、誰から指名しようかと教室を見渡しているのを確認するや否や、私は「自分に当ててくれ」というアイコンタクトをした。見事にそれがリセットに伝わり、私は指名され、なんとなく数字の「1」を言い終えて、隣のシェンにバトンタッチをした。その後、ロシア人のカッチャが18を言い終えたところで一巡した。

今度は、そこから三つずつ数を足していこう、という提案がリセットからなされ、私の番が再びやってきた。「1」という数字をオランダ語で言い終えた私は、満足げな表情になっており、その後の他のクラスメートの発言など一切聞いていなかった。他の人の発言を聞いていなかったものだから、クラスの人数は17人だったと把握しており—それと同時に、「20」という言いやすい数字を発音したかったということもあり—、勢いに任せて「20」と言った。

リセット:「ん？違うわよ。18+3よ。」

私:「えっ？カッチャ、いくつって言った？」

---

カッチャ:「18よ(笑)」

私:「ああ、そうならば・・・eenentwintig!」

リセット:「そうね！」

欧州小旅行の出発の日とその道中で誓ったことを私はすっかり忘れていた。欧州では「満足げな表情」を浮かべると必ず足元をすくわれる、ということ。数字の「1」を発音できたことに対していかに自分の中で喜びの感情が湧き上がってきたとしても、勝って兜の緒を締めなければならないのだ。その後、私の顔は新しい言語を学ぶことに伴う充実感から生まれる表情と侍の表情という二つから構成されていた、と思う。

次に簡単な挨拶表現をざっとおさらいしたところで、リセットが何やら教室の中央に歩き始め、椅子を動かし出した。

リセット:「それでは今から、オランダ語による『スピードデート』を行います♪」

一同:「何?(笑)」

リセット:「これまでのクラスで習った表現を駆使して、お互いに自己紹介をしましょう！」

見知らぬ男女が短い時間でお互いに自己紹介を繰り返していく活動のことを世間では「スピードデート」と呼んでいることを初めて知り、また一つ新しい語彙が獲得されたと思った。このクラスは中国人のシェン、イタリア人のファブリツィオ、ポルトガル人のフランシスコと私を除き、後は全て女性である。最初に自己紹介をしたのはインド人の女性であり、その後はインドネシア人、ルーマニア人、ロシア人、ギリシャ人、アイルランド人と自己紹介をしていった。二人目のギリシャ人であるイリアーナが最後の相手となった。

イリアーナ:「こんにちは！」

私:「こんにちは！ヨウヘイです。あなたは？」

---

イリアーナ:「イリアーナです。どこから来たのですか？」

私:「日本からです。どこからですか？」

イリアーナ:「私はギリシャから来ました。」

私:「おお、ギリシャから。では、何語を話しますか？」

イリアーナ:「ギリシャ語です。あなたは？」

私:「日本語です。」

実はスピードデートのエクササイズが始まる前に、もう一人のギリシャ人であるアンタから「あなたの年齢は？」という表現をオランダ語で何と言うのかについて教師のリセットに質問があった。この質問が加わったせいで、クラスメートの女性陣はやたらとこの問いを私に投げかけてくるようになった。

クラスメートの女性陣は一様に二十歳前後であり、最初に自己紹介をしたインド人のブハーブナはまだ十代だと思われる。そのためか、向こうから私の年齢について質問をしてきたにもかかわらず、私が実年齢を答えると、私の顔を一瞥し、当惑したような表情を浮かべていたのが実に面白かった。

その次のインドネシア人のレニーも私の年齢を尋ねてきたため、正直に答えると、少し固まっていた——これはオランダ語が出てこないという硬直状態とは何かが違う——。オランダ語で何か質問されたら、「あなたは？ (“En jij?”)」と聞き返すことをパターンとして獲得しつつあったが、さすがに相手のお国柄を理解しないまま、女性から年齢を聞かれて「あなたはいくつ？」と聞き返すことを控えていた。

イリアーナ:「何歳ですか？」

私:「30歳です。」

イリアーナ:「えっ、13歳？」

---

---

私:「いや(笑)、30歳。」

イリアーナ:「うわえ・・・うっそ～！30歳？信じられない！（英語）」

私:「うん、30歳(オランダ語)。さっきのアンタも同じような驚きをしたよ(英語)笑」

イリアーナ:「まだその事実を処理中(笑)」

イリアーナの驚愕したリアクションを受けたところで、このエクササイズが終了した。それにしても、私の年齢に関してクラスメートの女性陣から受けた一連の反応は何だったのだろうか？英語や日本語であれば、「太陰暦上の実年齢は30歳ですが、ある身体測定手法に基づいた身体年齢は17歳であり、ある心理統計手法に基づいた精神年齢は67歳ぐらいという結果が出ています」と答えることができるのだが、オランダ語ではそれができないもどかしさがある。他の国籍の人たちから、あるいは一般的に他者から自分の年齢はどのように映っているのか非常に気になる場所である。

スピードデートのエクササイズの後には、兄弟姉妹・祖父祖母・甥姪などを表す家族に関する単語を習い、単語の単数系・複数系の変化のさせ方と発音の仕方を習った。今日の内容を復習するとともに、まだ単語の発音規則が掴めていないので、初見の単語でも発音できるように発音のルールを学習したいと思う。

#### 374. 雑菌状態の中へ:「ノイズ」を学習に組み込む重要性

昨日のスーパーでの買い物は終始一貫して、見事にオランダ語のみで乗り切ることができた。毎日少しずつオランダ語を学習することによって、最初是一个の単語もわからなかった状況から、このように少しずつオランダ語の意味世界を理解できるようになっているのは実に面白い。

しかし、一転して今日のスーパーでの買い物では最後の最後で既存のパターンとは若干異なる変化球が投げ込まれた。この変化球に対してなす術なく、結局英語を使ってしまった。もちろん、現在繰り返して使い込んでいるオランダ語のテキストを今後もベースに学習を進めていくべきだと思うのだが、往々にしてテキストに記載の表現は最も綺麗な形のものであり、CDの音声もクリアな形で録音されている。

---

しかし言うまでもないかもしれないが、現実世界のコミュニケーションにおいては、表現が省略されることやスラングを含むこともあり、かつ周囲の環境が生み出す様々な雑音などが入り込んでいるのだ。それらの要素を全て「不規則性」と表現するならば、学習においては絶えず不規則性を意識しておく必要があるのではないかと思った。より理想的には、常に不規則性を組み入れた学習や実践を行うべきなのである。

今日の買い物の中で変化球に対応することができなかったことに対して、スーパーの出口を出るまで少し肩を落としていたが、上記のような気づきに至ることができたので、それはそれでよかったのだと思っている。帰宅後、再来週のクラスに向けた予習に早々と取り組んでいたところ、まさに上記の気づきを裏付けするような学術論文に出会ったのだ。

この論文は「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの課題論文の一つであり、タイトルは“Does noise provide a basis for the unification of motor learning theories? (2006)”である。論文の概要の中に、「サッカーの技術を高める練習の中にノイズを組み入れた方が、伝統的な単なる反復練習よりも成果が上がる」という研究結果に関する記述を発見した。

まさにここで述べている「ノイズ」というのは、私が上記で述べた「不規則性」に該当する。「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースで課せられているその他の課題論文の中では、かの有名な「10,000時間の法則」あるいは「10年の法則」が度々議論に上がっている。ここでは熟慮を伴った継続的な鍛錬の重要性が指摘されているのだが、より具体的に、実践の中にノイズを取り入れることの重要性にまで踏み込んで議論している論文は今のところそれほど見かけなかったのである。そのため、この論文の価値は、学習に不規則性(ノイズ)を積極的に取り入れていくことの効果を実証的に明らかにしたことにあると思う。

重要なことは、単に同じ練習を反復するだけよりも、練習の中に様々な不規則性(ノイズ)を組み込んだ方が、技術や能力が向上する、ということである。以前、元サッカー日本代表の中田英寿氏が、日本代表のパス練習は世界でも最高レベルにあるが、試合になるとその能力が存分に発揮されない、と指摘していた。これはおそらく、上記で紹介した私のオランダ語学習と状況を同じにしていることに一つの大きな要因がありそうである。

---

つまり、私が雑音のない自宅の中で、ヘッドホンをつけて綺麗なオランダ語の流れるCDを聞いているのが、日本代表のパス練習に近いだろう。そこには、実践の中で当然直面するであろう種々の不規則性が最初から蔑ろにされているのである。そのようなことでは、実践の中で練習の成果を発揮することなどできなくて当然のように思われる。

もちろん、その領域に関する初学者は、まずノイズをそれほど含まないところから徐々に型を身につけていく必要があるだろう。型の習得度合いに応じて少しずつノイズを含んだ実践をしていくことが、さらなる能力の向上につながるのではないだろうか。

そのため、私の場合、かなり熟達してきた日本語と英語に関しては常にノイズを入れながら学習を継続させ、まだ初学者であるオランダ語に関してはノイズをそれほど入れず、型の習得にまずは努めるという学習戦略が望ましいだろう。仮に、その道のプロであると自認する場合は、とにかくノイズを入れて実践に励むことが何より大切なのだと思う。ある領域で真に卓越した知性や能力を発揮する者は、決して無菌状態の中で己の腕を磨いてきたわけではなく、雑菌状態の中で武者修行する過程を通じて己の腕を磨いてきたのではないかと思うのだ。

一応、この論文の研究対象はサッカーにおける技術の向上に限定されたものなので、研究結果を安易に他の領域に拡張することはできないが、その他の知性領域・能力領域においても、ノイズを組み込んだ実践はさらなる成長に不可欠だと思う。というのも、私たちの知性や能力というのは、その挙動が本質的に不規則・非連続的であり、単調さを嫌う特質を持っているからである。知性や能力が次のレベルに到達した時、確かにそこには安定的な状態が生み出されるが、発達の移行期(向上期)は常に不安定的な状態なのだ。

変動激しい不安定的な状態が知性や能力の移行期の特性であるにもかかわらず、そこに単純な反復実践を盛り込もうとすると、歪な安定状態が生み出されてしまい、知性や能力がうまく伸びないのではないかと思われる。当面自分を実験台としてノイズの度合いと組み入れ方を探究していきたい。

フローニンゲンの気候も随分と秋めいてきたのだが、今日はとても暑い日であった。夏としての役目を果たし、爆発の中にフローニンゲンの夏が死んでいくかのようにであった。明後日からは、最高気温が20度前後の気候となるようだ。

日ごとに自分の思考空間が英語という言語に支配され、その間にオランダ語が組み込み始める中で、精神的な安定と治癒をもたらすために、一週間に一度は和書を読むという習慣が今のところ辛うじて続いている。自分の精神を安定させるという意味に加え、自分の日本語の世界をより豊饒かつ堅牢なものにしていくためには、一週間に一度は和書を読むという実践を継続させていく必要があるように思う。

先週末も、現在手元にある二冊の和書の内の一冊である森有正先生の全集第一巻を読んでいた。じっくりと読み進めていたため、ようやく本書を読み切ることができた。本書は、年代としては約60年ほど前の時代に書かれたものであるが、これほどまでに著者の近くにいる感覚を味わったことはこれまで一度も無かったのではないかと、思われる。

それほどまでに、森先生がパリで辿ってきた探究の軌跡というものが、自分のそれと強く共鳴していたのだ。ある意味、こうした先人を得ることができたというのは有り難いことであると同時に、どこか自己欺瞞の道へ転落させかねないという危惧を抱いている。というのも、森先生の歩みというのが、自分のこれからの歩みと多分に重なって見えており、先生の探究過程と自分の探究過程を安易に重ねて生きて行くことは、自分固有の探究プロセスを欺いているように思うのだ。

そうした自己欺瞞に陥らないためにも、自らの経験をもとにして文章を書き続けていくということを行っていきたい。文章を書くというのは、当然誰かに向けて表現行為を行うということを第一目的とするのだと思う。しかしながら、正直なところ、私は誰かに向けて毎日文章を書いているわけでは決してないのだと思う。とにもかくにも最初の読者に向けて文章を書き続けることが大事だと思っている。私の文章を読む最初の読者は私に他ならない。

ここで毎日共有されている文章は、第一の読者である私が、文章で書かれている意味を適切に理解しているかどうかに基づいて書き記されている。もし仮に、不特定多数の誰かに向けて真に伝え

---

---

たい内容を文章の形で書いていくのであれば、理路整然とかつより平易な言葉遣いで執筆していることだろう。

さらには、ここで共有されているように、自己の未熟さを他者に開示するようなことも決してないはずである。しかし、私たちが常に成熟への過程の中にいるというのであれば、私たちは常に未熟さの中にいると言い換えることができるだろう。

日々前進していくためには、私は自分に対して自己の未熟さを常に突きつけていく必要があると考えている。自分に向けて己の未熟さを知らしめるかのごとく、自己の未熟さを滲ませた文章を毎日自分で書き、最初の読者としてそれと否応無しに向き合う必要があると思っている。

結局、毎日書き記されている文章の多くは、私が自分の探究過程を常に確認するためのものであり、自己の精神的治癒と成熟へ向けた克己のためのものなのだろう。そうした意味で、現在の私にとって書くということが自助的なものとなっており、その意味合いは今後長らく続いていくかもしれない。

だが、私にはどうしても自助を突き詰めなければ、真の意味での他助はないと思うのだ。少なくともこれまでの人生で私を救ってくれた文章はどれも、著者が断固とした意志を持って自助に尽くした果てに生み出したものだけであった。2016/9/13

### 376.「タレントディベロップメントと創造性の発達」:第一回目のクラス

今日は「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの第一回目のクラスがあった。フローニンゲンに到着してから一ヶ月強の時間が経ち、ようやくプログラムが本格的に動き始めたのを感じる。

フローニンゲンに到着後、このコースが始まる前から、人間の知性や能力が卓越に至るプロセスについてあれこれ考えさせられることが多く、そもそも卓説性や才能と呼ばれるものは一体どのようなものなのかを自分なりに考える時間が十分にあった。待ちに待ったこのコースと共に、人間が持つ才能や獲得しうる卓越性について自分の考えを深めていきたいと思う。

---

このコースのコーディネーターは、私が所属するプログラムの責任者を務めるルート・ハータイである。実際にルートは、スポーツの領域におけるアスリートの卓越性について長きにわたって研究を進めており、年齢は若いながらも、この分野に関する知見を豊富に持っている研究者である。そして、ルートは初回、第三回、第七回のクラスを受け持つことになっている。

このコースの特徴を一言で述べると、「卓越性」や「創造性」と呼ばれるものを科学的な知見から理解を深めていくことにある。近年、スポーツの世界、教育の世界、企業社会において「タレントディベロップメント」という概念が注目を集めており、アカデミックの世界も「私たちの知性や能力はどのようなプロセスで卓越の境地に至るのか?」「どのような支援や仕組みが卓越性や創造性を涵養するのか?」というテーマに対して多大な関心を寄せているのだ。

このように、学術の世界や多様な実務領域において「タレントディベロップメント」という概念の重要性が高まってきている。このような背景を受けて、このコースでは卓越性や創造性の要因やその発達メカニズムに関する理解を深めるだけではなく、それらをどのように評価するのかというアセスメントについても理解を深め、またどのような仕組みや政策を企業や政府は導入すべきなのか、ということについても理解を深めていく。

話題が多岐にわたるため、実際にこのコースは、様々な教授が入れ替わりに講義を行う形式になっている。ここで各クラスの主なテーマを簡単に紹介したい。

第一回:「タレントディベロップメントと創造性の発達に潜むメカニズム:当該領域の研究に関する歴史」担当ルート・ハータイ

第二回:「タレントディベロップメントとパフォーマンスを決定づける心理的特性」担当:ニコ・ヴァン・イペレン

第三回:「スポーツにおける才能や創造性の発掘とその発達」担当ルート・ハータイ

第四回:「教育における才能と創造性の評価と支援」担当ヘン德里アン・スティーンビーク

第五回:「企業組織における個人の創造性とイノベーション」担当エリク・リーツシエル

---

第六回:「才能と創造性の測定・評価」担当ロブ・メイヤー&スーザン・ニーセン

第七回(前半):「コースの総まとめ」担当ルート・ハータイ

第七回(後半):『『精神病理は一種の才能か?』』担当ピーター・デ・ヨング

各回ともに非常に興味深いテーマであり、現在の私の仕事とも直接的に結びついているものばかりである。そのため、このコースを通じて学術的な知識を獲得することのみならず、それらの知識を実務の領域で活用できるような知恵にまで高めていきたいと思う。2016/9/14

### 377. 「才能」に関する近年の視点

「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースが行われるレクチャールームに到着すると、すでに教師のルートと20人ぐらいの学生がそこにいた。ルートと簡単に挨拶を済ませ、自分の席を確保した。事前にルートから話を伺ったところ、このクラスは履修定員の70名を超え、80名近くの受講者がいるとのことである。

その話通り、私が席に腰掛けるや否や、多くの学生が教室に入ってきた。オランダ語のクラスとは異なり、このクラスは修士課程以上の学生だけに提供されているため、教室を見渡すと、受講者の年齢が高めであることに気づいた。

この教室は受講者の人数が多いレクチャーに使われるものであるため、教室は広いのだが、一人一人の席のスペースは狭い。より詳しくは、長机が段差を形成しながらいくつも配置されており、一つの長机で一人が使用できるスペースが狭いのだ。

この教室がある建物は近年リフォームされたかのように綺麗なのだが、教室は歴史を感じさせる雰囲気漂わせている。教室の片側にはステンドグラスがあり、もう片側には開放的な窓がある。教室の黒板の横には、この大学が輩出した一人の名誉教授の写真が飾られている。この大学が400年を越す歴史を持っているからなのかもしれないが、学術探究が持つ神聖な側面に対して敬意を表し、それを守っていかうとするような隠れた意図を感じる。

---

そのようなことに思いを馳せていると、クラスが開始された。最初にクラスの概要が紹介され、本題に入る前に最終試験について説明があった。私は日本とアメリカで高等教育を受けてきたが、オランダで高等教育を受けるのは初めてであるため、成績評価の仕組みについて最初にきちんと理解しておく必要があると思っていた。

コースの中にはアメリカでの修士課程の時と同様に、簡単な論文を学期末に提出するものがある。その一方で、今回のコースのように「デジタル試験」なるものが導入されているコースも幾つかある。このコースにおける最終試験は、受講生が指定のコンピュータールームに行き、そこでコンピューターの画面上に現れる問いに答えていくというものである。

教師のルートに質問してみると、最終試験は七題の完全記述式問題から構成され、各設問は各回の講義の内容と課題図書に紐付いている、とのことである。個人的には、自分の関心テーマに従って短い論文をまとめる形式が一番好きなのであるが、完全記述式問題も好きな試験形式に属する。単に知識の有無を確認するような四択形式だけは勘弁して欲しいと思っていたため、完全記述式問題という形式に関してはあまり議論することはない。

私が教師のルートの立場であれば、今回のクラスの内容を元にとすると、「タレントディベロップメントに関する研究の歴史を眺めると、大きく分けて三つの潮流がある。そして、最先端の研究ではそれら三つの立場を統合したアプローチが採用されている。過去の三つの潮流についてその特徴を簡単に説明し、最先端の研究が持つ思想とアプローチの特徴について自由に記述せよ」という設問を最終試験に出題すると思う。試験時間は二時間であり、設問は七題であることを考えると、この設問に対して17分間を目安に英語で考えをまとめる必要がある。自分がこの設問に対する回答者であれば、今のところ次のように答えるだろう。

一つ目の潮流は、人間の才能を「氏」の観点から捉えるものである。つまり、私たちの才能は天賦のものであり、遺伝などによって決定づけられている、と考える立場である。歴史を遡ると、19世紀の後半に活躍したフランシス・ゴルトンを代表的な人物として、人間の才能の決定要因を遺伝特質に見出そうとする立場は現在でも存在する。

---

これまでの先行研究が示しているように、遺伝特質というのは確かに私たちの才能を規定する要因の一つである。例えば、両親のIQと子供のIQには比較的高い相関関係があることを指摘する研究成果があることや、アスリートの両親を持つ子供が身体的な特質を受け継ぎ、親子二代にわたって活躍する例も存在する。

そうした遺伝に関する例に加えて、才能の天賦性を示す顕著な例としては、「サヴァン症候群」という特定の領域に対して幼児期から傑出した能力を発揮するようなケースがある。例えば、これまで全くピアノに触れたことのなかった子供が—さらには、両親もピアニストではない場合もありうる—、初めてピアノに触れたにもかかわらず、類まれなリズムと音を奏でるようなケースがある。

サヴァン症候群は音楽に限らず、その他にも一度見た映像を決して忘れないという映像記憶に突出した才能もあれば、膨大な桁数の数字を暗算できるという才能もあるだろう。注目すべきは、それらサヴァン症候群の人が発揮する才能は、環境によって生まれたわけでも、練習によって生まれたわけでもないということである。ましてや、両親の遺伝特質にすら還元できない場合も多々あり、そうした才能はまさに天から与えられたものであるかのように見える。このように、人間の才能を所与のものとみなす立場が第一の潮流である。

一方、二つ目の潮流は、人間の才能を「育ち」の観点から捉えるものである。この立場は、私たちの才能は環境によって育まれるものである、とする考え方を持っている。歴史的には、フランス・ゴルトンと時を同じくして、スイスの植物学者アルフォンス・ドゥ・カンドールを代表的論客とし、ゴルトンの考え方とは異なり、私たちを取り巻く環境が才能の開発に最も重要であるとする立場である。

この立場を採用する先行研究を眺めてみると、確かに、子供の才能を開発することに関して、養育者の関与が有意差を生むという研究がある。さらには、アスリートの才能を真に開花させるためにはコーチの存在が不可欠であり、このように私たちを取り巻く他者の支援が重要であるとする研究成果は枚挙にいとまがない。微視的な視点で考えると、他者からの支援などが環境要因として挙げられるが、より巨視的な観点から考えるとどのようなことが言えるだろうか？

私たちの才能に影響を与える環境要因として忘れてはならないのは、文化的な影響や経済的な影響だろう。スポーツの例をとると、オランダという国は小国でありながらも、国を挙げてサッカーに取り

---

組むような文化がある。そうした文化に加えて、サッカー選手を育てることに関する経済的な投資も巧みに行っている。こうした投資のおかげで、オランダにはサッカーに取り組む十分な設備が整っているのだ。こうした文化的・経済的な要因を背景とし、オランダは優れたサッカー選手を数多く輩出し続けている。上記のように、人間の才能を微視的・巨視的な環境要因の観点から説明するのが第二の潮流である。

ここですぐに気づくのは、両者二つの立場はともに部分的な真理を内包していながらも、極端な立場であることがわかるだろう。そこでよく提出されるのは、「氏か育ちか」という二者択一ではなく、「氏と育ち」という折衷案である。仮にこの折衷案が人間の才能の発達に関して十分な説明をすることができるのであれば、先天的な才能を持った子供が恵まれた環境の中で育ちさえすればその才能が開花する、と言えることになるだろう。果たしてそれは本当だろうか？

答えは、「一概にそうとは言えない」というものであり、ここに第三の潮流が生まれた理由があるのだ。第三の潮流は、氏と育ちの重要性を認めながらも、人間の才能というのは「領域特定の」な特質を持っており、特定領域における十分な実践を積み重ねれば、いくら先天的な才能があろうが、環境が整っていようが、その才能は開花しない、という考え方を持つ。

第三の潮流の代表的な研究者は、フロリダ大学教授のスウェーデン人心理学者アンダース・エリクソンだろう。エリクソンは、「10,000時間の法則(別名「10年の法則」)」を提唱したことで有名であり、ある特定領域における熟慮の伴った実践こそが才能を開花させるために最も重要である、と考えている。確かに、特定領域で傑出した才能を発揮している人は、多大な資源を一つの実践に投下し、長大な時間をかけて実践に励んだ結果、卓越した能力を発揮しているケースを頻繁に見かける。

それでは、熟慮の伴った実践を10,000時間以上行えば、誰でも特定領域に関して優れた能力を発揮できるようになるのだろうか？これも安易にはそうだとは言えないだろう。というのも、エリクソンも表面的に認めているように、やはり先天的な才能や環境的な要因というものが存在しているため、単純に膨大な量の実践を積み重ねれば卓越の境地に至れるとは限らないのだ。

それでは、上記三つの潮流を合算した立場はどうだろうか？つまり、「先天的な才能に恵まれ、恵まれた環境の中で熟慮の伴った膨大な実践を積み重ねば、人は誰でも卓越の境地に至れるのだろうか？」

---

という質問に対して、三つの立場の折衷型は「Yes」という回答を自信を持って述べることができるだろうか。私にはそうとは思えない。上記の三つの潮流を単純に合算するだけでは、人間の才能の発達が持つ本質的に複雑動的な側面を適切に捉えきれしていない、と考えている。

重要なのは、上記三つの立場はそれぞれに固有の真理を述べていながらも、それらを単純合算するだけでは、人間の才能が持つ動的な発達過程を捉えきれしていない、ということなのだ。ここで求められるのが、人間発達に関する最先端の研究アプローチである、ダイナミックシステム理論の考え方と方法にあるだろう。

上記の三つの立場を単純合算するのではなく、それらの要素を掛け算として捉えるためには、特に「ダイナミックネットワークモデル」を採用することが有益だろう。ダイナミックネットワークモデルとは、応用数学のダイナミックシステムアプローチと社会学のネットワーク分析を複合したアプローチであり、人間の才能の発達に関して、遺伝特性、環境要因、実践量などの異なる様々な要因の相互関係を分析していくのである。それらの要素を単純合算的に並列するのではなく、それらの要素間の関係を分析し、それぞれの要素がその人にとってどれだけの影響を与えているのかという度合いまで分析していくのである。

モデルを簡略化すると、ある人の才能の発達を一生涯にわたって追跡するとき、遺伝特性の持つ強さ、環境要因の持つ強さ、実践量の持つ強さを定量化し、それら部分部分の要素の度合いを分析するのみならず、それらの要素がどのような相互作用を行っており、それらの要素の度合いがどのように変化してくのかを時系列に把握していくのがダイナミックネットワークモデルの肝である。

もちろん、ダイナミックネットワークモデルは誕生して日が浅い理論的・方法論的モデルであるため、才能を構成する要因の定量化の部分とそれらの相互作用の定量化に関して改善の余地が多分に残されている。しかし結論として、「人間の才能の発達は複雑かつ動的であり、様々な要素が相互作用することによって育まれるものである」という思想を持つダイナミックネットワークモデルは、上記三つの立場を統合する一つの優れた枠組みであると言えるだろう。

自分が作った設問に対して、私であれば以上のように答えるだろう。実際に回答してみると、17分間の回答時間を少しオーバーしていた。また上記の回答は、当日の試験と同様にテキストや論文

---

を参照することなく、今の私の頭の中にある知識で組み立てたものに過ぎないので、本番の試験に向けて、知識の補強と自分なりの考え方を洗練させておく必要があるだろう。

最後にもう一つ言及しておきたいのは、「問い」が果たす支援的役割についてである。上記のように自分で問いを設定し、自分なりの回答を提示してみるというプロセスを経て改めて気づいたが、「問い」を提供することは、発達支援を行う際に重要な実践方法である「足場固め(scaffolding)」の役割を果たすということである。

私が設定した設問はある意味非常に親切な作りになっており、この問いを読むだけで、私たちの頭の中には「才能の議論にまつわる過去の三つの潮流」と「それら三つの限界を乗り越えた新しい思想やアプローチ」について記述すればいいのだ、というフレームワークが自ずと構築されることになるだろう。こうしたフレームワークを提供し、学習者がそのフレームワークを上手く活用しながら実践を行っていくことが、「足場固め」の本質である。

もし仮に、設問の形を変え、「人間の才能に関する種々の立場や思想について自由に記述せよ」という問いが与えられるとどうだろうか？最初の問いに比べて、フレームワークの輪郭がぼやけていることに気づくのではないだろうか。結果として、この新たな問いの難易度は高くなっている。もし私が出題者のルートの立場となり、受講生の回答に差をつけたいのであれば、この新しい設問を採用することになるだろう。ただし、このコースの目的が人間の才能の開発に関する受講生の理解を深めることにあり、受講生を選別するものではないと思われるため、教育的には最初の設問が望ましいと思う。

いずれにせよ、私たちが発する「問い」というのは、支援的な特性を強く帯びているということがポイントである。コーチにせよ教師にせよ、あるいは人を育成する立場にある全ての人にとって、どのような問いを——理想としては「どのような問いをどのようなタイミングで」——投げかけるかが、支援される側の学習や発達に多大な影響を及ぼすということをもう一度思い出す必要があると思う。

---

### 378. 注目を集める教育手法「非線形教授法 (nonlinear pedagogy)」について

ここ最近では、スポーツ科学の研究成果から人間の知性や能力の発達について考えさせられることが多い。実際に、スポーツ科学の学術論文を読んでもみると、そこには非常に面白い研究手法や研究結果、そして能力開発に関する有益な知見が数多く存在することに気づく。

昨日は午後から、「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースの第三回目のクラスで必読論文とされている“Representative learning design and functionality of research and practice in sport (2011)”を読んでいた。この論文は、スポーツの領域における能力の発達に焦点を当てているが、一般的な教育の世界や企業社会での人財育成に活用できる重要な知見をいくつも含んでいる。

特に、「非線形教授法 (nonlinear pedagogy)」という手法が、身体教育やスポーツコーチングの世界に取り入れられつつある、ということに私は着目した。非線形教授法とは、ジェームズ・ギブソンの生態心理学とダイナミックシステム理論の原理を応用した新しい教育手法である。

非線形教授法のベースには、学習者は環境という動的なシステムを映し出す複雑な神経生態学的システムであると見なされ、これら二つの動的なシステムは相互作用を行っている、という考え方がある。特に重要な考え方は、私たちがアクションや意思決定をするための関連情報は、私たちと環境の相互作用によって生み出されている、ということである。

言い換えると、非線形教授法では、学習者を複雑な神経生態学的システムと捉え、環境を構成する様々な要素と自分自身を構成する様々な要素が生み出す相互作用の中から、その場に最もふさわしい適応的な振る舞いを学習者は無意識的に選択すると考えられているのだ。

結局のところ、この論文で書かれていた内容を実務の世界に応用する際に重要なのは、私たちの知覚とアクションは常に環境との相互作用によって生み出されるものであるため、どのようなトレーニング環境を設計するかが能力の発達に大きな影響を与える、ということである。私たちの知性や能力は、特定の領域のある文脈において発揮されるという特質があるため、トレーニングの際にどのような文脈設定を行うかが極めて重要な鍵を握る。

---

また、非線形教授法においては、一人一人の学習者が環境からどのような情報を得ているのかを分析し、各人異なる動的なシステムの運動を適切に刺激していくようなタスクを与えていくことに特徴がある。要するに、ある特定の知性や能力を伸ばすトレーニングを計画する際には、個人に着目するだけでは十分でなく、個人と環境の双方—さらには両者の相互作用—を考慮していく必要があるのだ。環境の設定とタスクの設定はこれまでも強調されていることかもしれないが、もう一度、その重要性を確認しておく必要があるだろう。

上記の非線形教授法は、以前に紹介したように、「ノイズ」を学習プロセスの中に組み込むことの重要性と関係している。知性や能力の発達支援を行う際には、複雑かつ変動の激しい環境の中でタスクに従事させることに加え、環境の複雑性を低減させることなく、その複雑性に適応する形で知性や能力が発揮できる力を養うことに主眼を当てる必要があるのだ。

発達支援を行う際にはとにかく環境やタスクの複雑性を低減させる形で学習に従事することが勧められがちであるが、生態心理学やダイナミックシステム理論の観点からするとそれはあまり望ましいことではなく、学習者を動的かつ複雑な環境の中に絶えず置いて支援にあたることが何よりも重要なのである。

非線形教授法に関する論文はその他にもたくさん存在するので、それらを調べる過程で能力の開発に関する自分なりの考え方を深めていこうと思う。

### 379. エゴン・ブランスウィックの「心理学的生態学」に関する所感

ようやくフローニンゲンの街の天候パターンを掴み始めたと言えそうである。この街に到着した当初は、天気予報では降水確率が低いにも関わらず、雨に見舞われることが多々あったため、つくづく天気というのは予測の難しいダイナミックシステムだと頭を悩ませていた。

単純に降水確率では割り切れないような複雑な確率的現象が天候には含まれているのだとつくづく思われていた。そうした複雑な確率的側面を持つフローニンゲンの天候に対して、徐々に順応している自分がいるのは確かである。

---

具体的には、これまでは天気予報を信じることなく、常に折りたたみ傘を携帯して外出していた。しかし最近では、天気予報を参照した後に、今この瞬間の空気の匂いを含めた天候の雰囲気を手掛かりとして折りたたみ傘を持っていくのかどうかを判断している。

天気予報と目の前の雲の色や形だけを判断材料にすると、これまで散々と裏切られきたため、環境から抽出できる情報をより広く取り入れることによって意思決定の判断をしてみると、その予測精度が格段に向上したのである。ここから、私という人間は複雑な確率的環境世界の中に組み込まれていたとしても、環境に適応し、環境から学ぶことによって、複雑な確率的環境世界に押し潰されることなく生きることができているのではないか、と思った。

そもそもこんなことを考えるきっかけになったのが、昨日読んでいた論文の中で何気なく言及されていたエゴン・ブランスウィックという心理学者の思想である。昨日初めて私は、元カリフォルニア大学バークレー校教授エゴン・ブランスウィック(1903-1955)というハンガリー人の心理学者の思想に触れることになった。

ブランスウィックは、心理学の歴史において、人間は環境に対して積極的に適応しながら思考や行動を変化させていく、という「機能主義」の考え方に多大な影響を与えた心理学者として知られている。特にブランスウィックが提唱した「確率論的機能主義(probabilistic functionalism)」は注目に値する。

ブランスウィックは、自身が31歳の時に提唱したこの思想を生涯をかけて深めていったと言っても過言ではない。この思想の核には、当時の心理学の主流的な考えを批判し、知性を発揮する主体そのものの特性のみならず、主体が置かれている環境の特性についても焦点を当てるべきである、という考え方がある。

この思想を基にした確率論的機能主義とは、主体が関与する環境は常に変動するものであり、その変動の中に物理的な法則性がいかに見出されようとも、確率的な不安定さを環境は常に内包している、という考え方である。偶然ながら、ブランスウィックと同時代に生きていたジェームズ・ギブソンの生態心理学も環境特性に着目するという性質上、両者の発想は非常に似ているかもしれない。

---

ギブソンの生態心理学でキーワードとなるのは「アフォーダンス」と呼ばれるものであり、私たちは環境からのフィードバックに基づいて自身の行動を決定していく、とみなされている。このアフォーダンスの考え方と似ているのがブランスウィックが提唱した「生態学的妥当性 (ecological validity)」と呼ばれるものである。

私はこの概念をてっきり、心理統計学の分野で習った言葉として捉えており、研究過程における実験設定が実際の環境設定に適合している度合いだと思っていた。しかし、ブランスウィックの論文を読むと、少し意味が異なることに気づいた。

簡単に述べると、生態学的妥当性とは、外部環境からのフィードバック情報と知覚の間にある相関関係の度合い、と捉えていいだろう。例えば、スーパーで売られている桃は外見の色からその完熟度合いを知覚することができる。この場合、生態学的妥当性は1となる。なぜなら、桃の完熟度合いは見た目の色と強い相関関係があるからである。一方、桃の上にラベルが貼られており、そのラベルが完熟度合いと何ら関係しないものであれば、その生態学的妥当性は0となる。

ギブソンは「生態心理学 (ecological psychology)」を提唱し、ブランスウィックは「心理学的生態学 (psychological ecology)」という発想を同じくする学問領域を打ち立てていることが面白い。どちらも共に、有機体と環境を切り離すのではなく、それらの相互関係を絶えず意識し、特に環境からの働きかけの性質を探究していったという共通点がある。二人の発想は、ダイナミックシステム理論を活用した発達科学の研究に多大な影響を与えていると思われた。

### 380. 第四回目のオランダ語のクラス: 所有格・時間表現・時の前置詞など

昨日から今朝にかけて、時空間の隙間に挟まっている感覚があったが、降り注ぐ雨を眺めていると無事に現在の時間と場所に戻ってくることができたように思う。オランダ語の学習は非常にゆっくりとだが、確実に日増しに進歩しているのを実感している。こうしたわずかばかりの進歩を見逃さずに発見していくことが、何よりも自分の学習動機に好影響を与えていると思うのだ。

新しい言語を学ぶことに伴って、その言語を使って何かを表現することの苦しみと喜びを実感することができる。新しい語彙や文法事項を習っても、すぐにそれを活用して自分の伝えたいことを表現できるわけではない。その際には、苦虫を噛み潰すようなもどかしさが内側にあるのだが、ひとたび

---

たどたどしくても自分の伝えたいことを表現することができた際には、何とも言えない喜びがあるのだ。

今日は第四回目のオランダ語のクラスがあり、本日も学びの多いクラスであった。毎回新しい語彙や文法表現を習うことが楽しみで仕方なくなってきたおり、クラスが終わって帰宅すると、自分の専門分野の書籍や論文を読むことよりもまず最初に、クラスの復習と宿題をこなすことが習慣になりつつある。宿題を済ませてから昼食を摂っていると、今の自分にとって、オランダ語を話すことはパンを噛むことに等しく、英語を話すことは水を飲むことに等しく、日本語を話すことは空気を吸うことに等しい感じがしていた。

オランダ語を話すときは噛むことを意識しなければならないが、英語を話すときはもはや噛むことを意識する必要はほとんど無い自分が出来上がりつつある。これまでは英語と日本語しか習得言語がなかったため、英語で思考することが難しい場合には常に日本語に移行して思考する自分がいた。私の中では、英語と日本語が交友関係を結んでおり、英語が窮地に陥ると日本語が支援の手を差し伸べすようなイメージがある。オランダ語を学び始めてみて面白い感覚がするのは、オランダ語を学習するときは絶えず英語が支援の手を差し伸べており、そこに日本語は一切介入しないのである。

今こうして日本語で振り返りを行っているのは、今後オランダ語と英語が強力な交友関係を結び、私の日本語を駆逐してしまう恐れがあるからかもしれない。日本語でオランダ語学習の振り返りを行うことによって、三つの言語の関係性を友好的なものにしようとしている自分がいる。数ヶ月前に考えていたドイツ語とフランス語を合わせて学習するという案を採用するよりも、当面は三国同盟の結びつきをより強固なものにしたい。オランダ語、英語、日本語という三国同盟を対等の関係で結べる日が来た暁には、どのような言語世界が自分の中に広がっているのか非常に楽しみである。

今日はいつも私たちにオランダ語を教えてくれているリセットが休みであり、代わりにリスベツトという先生が今日のクラスを担当することになった。リスベツトもリセットと同様に、あるいは彼女以上に、気さくな先生なのだが、クラスの98%をオランダ語で突き通したことには生徒一同が驚かされた。リセットはクラスの85%ぐらいをオランダ語で行っていたため、二人のティーチングスタイルの違いに対して、

---

最初は全員が少し戸惑っていた。とにかく今日は意味が分かるが分かるまいが関係なく、オランダ語漬けになっていた印象がある。

英語をどれだけ許容するかということに関しては、どちらにも一長一短があるが、リスベットの戦略は見事なものであったと思う。リスベットはクラスを開始するや否や怒涛のようにオランダ語で話し始め、その流れから生徒にオランダ語で色々と質問を繰り返していった。その戦略によって、クラスの中には「英語禁止」の雰囲気は自ずと醸成されることになったのだ。このような雰囲気の中、私たちはとにかく自分で表現できる範囲のことをオランダ語で伝えようとし始めたのだ。

そして、どうしてもオランダ語で表現できない時には、申し訳なさそうに英語を少々使うことになった。やはりこのように、何とかオランダ語で表現しようとする訓練を積んでいくことは、私たちのオランダ語を向上させることに有益だと思った。

そのような雰囲気の中、今日のクラスが開始されたのだ。準備体操がてら、先日取り扱った会話事例を一文ずつ一人一人が音読していった。私の左隣に座っているイタリア人のファブリツィオが長めの文章にぶつかり、「ご苦労様」と思っていると、彼が私の想像以上に流暢に発音したものであるから、思いがけない早さで私の番になった。「やるな、ファブリツィオ」という想念が一瞬頭をよぎっていたため、私の文章は極めて短かったにもかかわらず、冒頭に一瞬の空白があった。私はなんとか文章を読み上げ、右隣に座っている中国人のシェンランにバトンを渡した。

この音読が終わった後、テキストに掲載されている家族の写真を見て、これまで習った表現を駆使してその家族について自由に表現するというエクササイズを行うことになった。私の練習相手は右隣のシェンランであった。

私:『この家族は…五人です』だよね？」

シェンラン「そうね。じゃあ…『この息子は…小さい』であってる？」

私:「うん、あってると思うよ。『この娘は…息子よりも…年上だ』かな。」

---

シェンラン:「じゃあ、これはどう・・・『この娘の・・・髪は・・・巻き髪だ』」

私:「いいね。さっき習った表現だね。じゃあ、こんなのはどう・・・『彼女には・・・あごひげがある』」

シェンラン:「え？(笑)彼女じゃなくて彼じゃない？それに、あごひげ“board”じゃなくて口ひげ“snor”よね(笑)」

私:「あっ、しまった(笑)。そうだね、もう一度言い直してみると・・・『彼には・・・口ひげがある』かな。

テキストに記載の写真を見て、それを表現するという何気ないエクササイズにも様々な楽しさがあることに気づいた。クラスの98%がオランダ語で進行していたため、このようにシェンランと英語を交えながら会話できたことがとても良い息抜きになった。オランダ語という固いパンを多く嚙ることによって、英語という水を飲み干すことがますます容易になっていく。

その後、所有格について習い、時間の表し方と時間に関係する前置詞について習った。個人的に興味深く思ったのは、オランダ語での時間の表し方である。一番変わっているな、と思わされたのは、例えば「11:25」の言い方である。英語では「eleven twenty five」と言えば良いところを、オランダ語では「vijf voor half twaalf (12時の半分の5分前)」と言わなければならないそうだ。教師のリスベック曰く、奇妙に聞こえるかもしれないが、オランダ人は本当にこのように表現する、とのことである。

本日のクラスも面白い発見がいくつもあった。今日は初めてオランダ語によるライティングの宿題が課せられた。オランダ語のリーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの四つを包括的に学び、少しずつそれらの力を付けていきたいと思う。